IS≪インフィニット・ストラトス≫～あるびのっ！　祭～

水深無限風呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ≪インフィニット・ストラトス≫～あるびのっ！　祭～

【Ｎコード】
Ｎ０９５６Ｙ

【作者名】
水深無限風呂

【あらすじ】
女性にしか反応しない世界最強の兵器「インフィニット・ストラトス（ＩＳ）」の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し女尊男卑が当たり前になってしまった時代。
しかし、この世界では女尊男卑の他にもある一つの変化が起きていた。それは――――
ひたすらにスピードを追い求める『変態機関』や、外見は軍事ＩＳシェア第一位の優秀な企業だが、中を見れば『これは酷い』としか言いようが無い『変態企業』の出現。

この物語は『変態機関』に知らず知らずの内に入り込んでしまったアルビノの少女の伝記。

※先天性色素欠乏症（アルビノ）のオリ女主が原作に介入する話です。

※以前投稿していた『ＩＳ≪インフィニット・ストラトス≫～あるびのっ！～』のスマート版リメイク作品となっています。

初式　チームメンバーは全員変態（前書き）

お久しぶりです。
今度は抑え気味かつ大胆に行きます。もう失敗なんてしない。何も怖くない。

初式　チームメンバーは全員変態

夜の並木道。
私の乗る車以外の車は一切見えず、歩く人ももちろん居ない。
そして、覗く窓からは明かりのついた家はまだしも、明かりのついてない家すらも見えない。
見えるのは最低限整備された道路と、規則性正しく立てられた街灯ばかり。
何分か、何時間か。
いくら見続けても変わらない景色。

「今日の晩御飯、何がいい？」

景色を見続ける私に運転手……ニコラスがバックミラーでこちらの顔を見ながら話しかけてくる。
晩御飯って。
どうせ作るの私なのに。
そう思って黙っていると、向こうも気まずくなったのか、バックミラーから目をそらして再び前を見ながら運転する作業へと戻る。
うん、それでいいのだよニコラス君。
君は黙って運転してたまえ。

「あー……シェミー？」
「……んー？」
「……怒ってるか？」
「べっつにー」

どうやら無視したのが気になったらしい。
別に怒ってるワケじゃない。ただ返事するのが面倒なだけであっ

て。
……返事が面倒って。
典型的なコミュニティ障害の症状じゃない……。
まあ、いいか。
どうせ別に学校に行くでなし、他者と交流するでなし。
毎日毎日兵器乗り回して、毎日毎日……。
もういい、考えるだけで死にたくなるほど憂鬱だ。

「……はぁ」

思わず溜め息。
さて、暇だし私の身の内話でもしようかしら。
私の名前はシェミー。シェミー・アッシュダウン。先天性色素欠乏症（アルビノ）がチャームポイントの遺伝子レベルで劣ってる女の子☆
こんなチャーミーな私だけど、生まれは田舎中の田舎。どれくらい田舎っていうと、未だに電気が通ってないくらい田舎。
そんな田舎に先天性色素欠乏症（アルビノ）の少女が生まれればどうなると思う？
医学の知識なんて水で傷口を洗うことぐらいしか広まってない田舎。
そこで突然生まれた白髪赤眼の子供。
無論神格化されるワケよ。
私の髪は太陽のように輝くとされ、私の瞳は千里先まで見通し、未来すらも見透かすとされ、私の手は時を捻じ曲げるとされ、私の足は風の如きの速さで走るとされ、私の血は不老不死の秘薬とされた。
めちゃくちゃなんてもんじゃないわ。
髪が太陽のよう……まあ、光の反射とかである程度は光るわよ。
でも太陽光は私にとって最も恐ろしいものだし……。
瞳が千里先まで見通し、未来すらも見透かす？　バカ言うんじゃ

無いわよ。眼前の文字すら読み難いわ。
手は時を捻じ曲げる？　どんな厨二設定よ、ありえないでしょう？
足は風の如き速さ？　バカ言え、ただでさえアルビノで太陽光に弱いから外出できないってのに、さらに食事は肉は食べちゃダメとかで体力がガタ落ちしてるんだから、そんなに早いワケないじゃない。
血は不老不死の秘薬？　水銀でも飲んでろ。
さてまあ、そのころの私の人生は幸福なのか不幸なのか分かり辛かったけれども。
大体八歳ぐらいかしらね。私の人生は思いっきり不幸な方向に倒れたわ。
理由は実に単純。
『吸血鬼』っていう話が村に入ったからよ。
吸血鬼。太陽光を極めて嫌う人ならざるもの。
そんな存在と私は『太陽光を嫌う』という一つの点で同じとされ、村から迫害。
そして苦しい日々。両親は働き詰め、それでも忌むべき子の親ってことで報酬は三分の一程度しか貰えなかった。
食物もなく、ただただ、苦しいだけの日々。しかも原因は私。
もはや飾り付けの偶像にもならず、今では逆に自分達を苦しめる、ただの役に立たない欠陥品と成り果てた私。
迫害されてから二年後。無論私は自分から家を捨てた。
私のような遺伝子レベルで劣っている存在のために、あの二人がボロボロになる姿が見るに耐えられなかったのよね。うん。
……んで、路頭に迷っていた私は運転手……まあ、ニコラスに拾われ、今に至るわ。
……絵空事みたいな過去だけれども、事実なんだから仕方ない。
さて、私の事は話し終わったわ、次はあなたのことを聞かせてちょうだい？
え、何？　友達いない？　引きこもり？　定職ナシ？　親の金食

って生きてる？
最低じゃないの。
……。
……。
私は一人で何を脳内妄想してるんだ。……あーもーヤダ。

「シェミー」

自己嫌悪に陥ってたところ、ニコラスがバックミラーではなく、実際にこちらを振り向きつつ私の名前を呼ぶ。
どうやら現在の我が家についたらしい。
我が家っていうか、我が機関？
一応説明しましょうか。
私が今到着した幽霊スポットにでもなりそうな、非常に古ぼけた施設。
その名は『シェミハザ機関　本部』。支部なんかないから本部って名前は意味ないけど。
まあ、そんな場所ね。……ちなみに補足するとここのリーダーがニコラスで、そのニコラスに拾われた私も当然この機関のメンバーよ。
んでもって、シェミハザ機関ってのは、現在における最強の兵器として世界のバランスを崩し続けるＩＳ……正式名称イズ。　じゃなくてインフィニット・ストラトスの研究と、世界で最も萌える二次元少女を研究し続ける愛と正義のイカ臭い変態機関よ。
さて、ついでだからＩＳについても説明しようかしら。
ＩＳ。まあ、さっきも説明したけど、現状最強の兵器。元々は宇宙開発だとかなんだかのモビルスーツだかパワードスーツだかなんだかだったらしいけれども、結局は兵器として開発したほうが有用だってことで兵器化されたモノ……なのだけど。
ＩＳには致命的な欠点があったのよね。うん。

それは『女性にしか動かせない』ってこと。
……なんで？　知らんがな、女好きなんじゃね？
まあいいか、アルビノ系少女である私には関係の無いことだし。
兎にも角にも、ＩＳは女性にしか動かせない。
……こんなところかしらね。
……。
私はいったい誰に説明してるんだか、疲れてるのね。きっと。
あーもーだめだー。寝よう寝よう。夕食？　酸素と二酸化炭素と窒素でいいわよ。
ダイエットダイエット。これ以上痩せたら肋骨浮き出そうで怖いけどダイエット。
……浮き出て無いわよね？
ちょっと服を捲って脇下辺りをチラリと見る。
……う、薄く浮き出てる……。
に、肉……肉を食わないと……。
ま、待て……。
ちょっと指でなぞってみる。
……凹凸あるがな。
やばいでしょ。痩せすぎ、痩せすぎ……マジで。
私が自分の体脂肪率の低さに危機感を覚えていると、コンコンと窓を叩く音。
若干血の気の引いた顔でそちらを見れば、ニコラスが不思議そうな表情でこっちを見ていた。
どうやら先に下りて、施設内に入ったのはいいが、私が付いて来てないことに気づいて戻ってきたらしい。
「シェミー？　何をやっているんだ？」
「い、いやぁ。別に……」
捲っていた服を急いで戻し、車から降りる。

……ああ、どんどん欝になってくよジョニー……。
若干ふら付く足取りで施設内へと入る。

「おぅ、シェミー。遅かったな」

施設内に入ってコンマ一秒。
このホラーチックなボロ施設に似合わないタコ坊主がヒョッコリと顔を現し、私へと話しかけてくる。
が、無視。めんどい。
一応説明すれば今話しかけてきた頭悪そうなタコ坊主の男の名前はボルゾイ。……まあ、ボルゾイってのは私が勝手に呼んでるだけなんだけども。
本名は知らない。知りたくもない。

「おいおい、挨拶もナシかよ？」
「うっせ、黙って掃除してなさい」
「あ？　随分と反抗的だなぁ、お嬢様よぉ」

ギロリとボルゾイが睨んでくる。恐らく気が弱い人なら顔を青くして逃げ出すであろう程の眼光。
お前はマフィアかなんかか。
……しかしまあ、こんな事を言われても別に恐れる必要はない。ボルゾイはドMで足フェチの変態だし、それに無駄に筋肉付いてるけど基本的にデスクワードしかやらない人間だから。
ちなみに趣味で同人誌描いてる。私を主題としたヤツを描き始めたときに半殺しにしたのは記憶に新しい。
まあ短く言えば、コイツは見た目だけは結構アレだけれども、中身はキモオタで人を殴る程の度胸なんてない、と。

「おい、何とか言えよ？　あ？」

だけどＵＺＥＥＥＥＥＥＥ！！
さっきのに紹介に追記。非常にしつこい。ねちっこい。
きっとこのまま放っておくとずっと言ってそうなので、何とか言うことにする。

「じゃあ……一言だけ」
「おう、言ってみろ」

自信満々に立ちふさがるボルゾイ。よし、一言言うぞー。

「私のニーソックス返して」
「まぁ、元気そうで何よりだ。あ、そういや俺達は先に夕飯済ませちまったから俺達の分は要らないぜ」
「私のニー」
「さあ、今日はもう疲れたんじゃねえか？　ゆっくりと休めや」

一言言った途端に表情を百八十度変えて、背中を押してくるボルゾイ。
返せよ。私のニーソックス。
まあ、いいか……今更返されても使いたくないし。
心底呆れつつも、背中を押すボルゾイに身を任せ、施設を奥へ奥へと進んでいく。
ひたすら奥に進んで私の部屋。
……私の部屋……というか、監獄？
なんせ、施設の入り口からは相当離れてるし、しかも異様に長いエレベーターを降りるし、入り口は電子ロックが三つ、鍵が三つ、ダイヤル式の南京錠を九つ掛かってる。
おかしいでしょ。

「……ねぇ、いつも思うんだけど……。ここ完璧に監獄よね？」
「……まあ」

つい愚痴気味にボルゾイに聞いてみれば、苦しい表情で適当な答えが返ってきた。
何が「まあ」だ「まあ」。

「はぁ……、こんなとこに入れなくても逃げないっての……」

愚痴を呟きつつも、電子ロックの番号を打ちつつ、三つの鍵を使い、南京錠も外す。
我ながら完璧な記憶力。うん。
ああ、ここで追記するけども、私には先天性色素欠乏症という欠点の他にも誇れる所が二つある。
まず一つめは記憶力。一度見ればそれだけで完璧に覚えるし、二度と忘れない。ちなみに私はこれを『完全記憶能力（ランニングラーニング）』と呼んでないわ。
で、二つめが身体能力。この五年間、毎日毎日ＩＳを乗り回していたせいで、とっても鍛えられました。うん。オリンピック出場したい。ちなみに私はこれを『超優性遺伝（ドミナント）』と呼んでるわけがないわ。
はい、自慢終了。寝よ寝よ。
ロックが解除された部屋の中を見て再び思う。
ああ、監獄っすね、これ、と。
ベットはパイプベットだし、それ以外服を詰め込むダンボールぐらいしかないし。

「どうみても監獄です。本当にありがとうございました」
「……監獄にはな、二種類あるんだよ。人を逃がさないための監獄と。人を守るための監獄がな」

ぼそっと呟くボルゾイ。
何言ってるんだコイツ。
まあいいか。
私は意味不明な発言をしたボルゾイのことを気にもせず、硬いパイプベットに横になる。
硬ぇ。
床並みに硬ぇ。
全く嫌ンなっちゃうね。もう。
あぁ、嫌だ嫌だ……等と思いつつも、私の意識はだんだんと薄れていく。どうやら相当精神的にキてたらしい。
明日もまたＩＳ乗ってＩＳ乗って……まあいいか、明日のことは明日考えよう……。

◇

深夜。シェミーが寝付き、その後夕食を取ってなかったニコラスがインスタントラーメンを摂取し終えた後。
シェミハザ機関本部の会議室には五人の男が円形のテーブルを囲むようにして座っていた。
全員が真剣かつ、暗い面持ちで互いの顔を見合っている。
傍から見ればそれは今にも倒産しそうな大手企業の重役会議に近い物があった。
「……今日のシェミーの様子。どう思う」
「すごく……鬱っぽいです……」
だが、その会議内容は会社の倒産話、というよりも年頃の娘が分からずに悩む親同士の話のようなものだった。
「あれか、服か？　服が足りないのか？」

「いや、違う……そう。あれだ。生ライブ」

リーダーのニコラス、そしてサブリーダーであるジャッキー共々に自分の想像上の十五歳の少女が欲しそうな物を思い浮かべ、口にするが、なんとなく違う気がして誰も触れはしない。

再び沈黙。

各々が頭を捻り、何がシェミーを喜ばせるかを一心不乱に考える中、堂々と腕を組み、自身満々な様子を見せる男がいた。

「バカだよな、お前らは……」

その男はそっと呟き、静寂にその言葉を響き渡らせ、他の五人の視線を集める。

「……じゃあ、お前の意見を聞かせてみろ」

その男の名はボルゾイ。決して本名ではないが、ボルゾイで構わないだろう。

「ふっ、スポーツだよ、スポーツ……いや、どっちかって言うとチアガールだな。きっと赤と白とか青と黄とかの目立つ色のミニスカとノースリーブの服とか着ちゃって、こう、跳ねたり……跳ねたり……」

ボルゾイの極めて変態的思考の下に弾き出された答えに、一同は軽蔑の視線を送る。

そして、はぁ。と溜め息を吐きながらもニコラスはゆっくりと口を開き、自分の意見を口にする。

「それはお前の願望だろ？　……いやでも、跳ねた時に服が風の抵

抗を受けて少しだけ上にズレて……あの白魚のように白いおなかが見えるのかと思うと……胸が熱くなるな」

ニコラスの極めて変態的思考の下に弾き出された答えに、一同は軽蔑の視線を送る。

そして、はぁ。と溜め息を吐きながらもサブリーダーであるジャッキーはゆっくりと口を開き、自分の意見を口にする。

「この変態が！　まともに考えろよ！　シェミーが可愛そうだと思わないのか！？　……いやでも、跳ねた時にミニスカが若干捲れあがって……あの白蛇のように艶かしい足が見えるのかと思うと……胸が焼け落ちるな」

ジャッキーの極めて変態的思考の下に弾き出された答えに、一同は軽蔑の視線を送る。

そして、はぁ。と溜め息を吐きながらも技術担当の通称『廃ポケ（チャリンコギコギコ）の伝道師』はゆっくりと口を開き自分の意見を———。

「まったく、君達は何を考えているんだい。年頃の女の子と言ったら海だろ？　海に言って露出度の高」

「もういい、大体分かる。私もそれは見たい。だがそれは現状を打破することができた後の楽しみに取っておこう」

言えなかった。

「い、水着を来たシェミーがチャラそうな男二人にナンパされてあたふたと焦っ」

が、その静止を振り切って廃ポケ（チャリンコギコギコ）の伝道師は自分の欲望をはき続ける。

「もういいと言ったのに続けるな！　この変態が！」

そんな廃ポケ（チャリンコギコギコ）の伝道師に同属嫌悪から来るのであろう不快感を覚えたニコラスは、手元にあったペットボトルを廃ポケ（チャリンコギコギコ）の伝道師へと投げつけ、その話題を終わりに――――。

「ああ、なるほど……そのあと押し切られて人気のない場所で体中を撫で回さ」

できなかった。

機体整備担当のエドガーは廃ポケ（チャリンコギコギコ）の伝道師の落とした話を見事回収し、自己流アレンジを加えつつ、更に話を展開する。

「エドガー、お前もか！」

そんなエドガーへと今度はサブリーダーのジャッキーがペットボトルを投げつけ、今度こそ話に終止符を打つ。

「……さて、もとの話題に戻すぞ……」

「ああ、確か……サンタコスをしたしぇみたんがマジしぇみしぇみっていう」

「地獄で私に詫び続けろジャッキィィィィ！！」

リーダーであるニコラスがサブリーダーであるジャッキーを殴り飛ばす。

なんとも連帯感が取れてなく、尚且つ似た者同士の集まりの機関である。

「殴ったな！？　友人には殴られたこともないのに！」

「まあ、それは……お前に友人なんかいないからな」
「……反論できない、死にたい」
「けどまあ、そんなこと言っちまったら俺達全員友人とかいねぇけどな！」
「「……」」

なんとなくか、確信犯か、あるいは笑いが起きるとでも思ったのかは分からないが、ボルゾイのその一言により若干盛り上がっていたシェミハザチームの士気は再び地の底に叩き付けられる。

「……はぁ、まあいい。……そういえばネイサン。お前はずっと黙ってるが、何か意見はないのか？」

かなりのローテンションでニコラスは、ずっと黙り込んでいる医療担当のネイサンへと意見を求める。
そこでネイサンは「やっとか」と言わんばかりに目を光らせ、自信有り気な表情と共にゆっくりと口を開いた。

「……今日のシェミーの髪の香りと体脂肪率……、更には脇の味と血圧……、そして抱き心地と直に触って計った体温から考えるに……」
「待て、考える前に何をやってるんだお前は！　匪賊には誇りも無いのか！？　幸せそうだな、羨ましいよ！」

とんでもない水素爆弾級の発言をしたネイサンに、ニコラスは嫉妬と怒りを混ぜつつ、罵倒を浴びせる。
そんな罵倒に怯みもせずにネイサンはニヒルな表情を浮かべて一言。

「……何って、ナニに決まってるじゃないか」

極めて変態的な発言だった。

「やかましい！　……どうやってやった！？」

そして、それに対し今度は強烈なストレートから復帰したジャッキーがツッコミをいれる。

「ああ、シェミーは貧血で朝弱いからそこで若干強気にかかれば楽勝よ。腕の中で恥ずかしがる姿は格別だったぜ……と。さてまあ、タネ明かしもしたんだから俺を責めるなよ？　それよりシェミーだろう」

実際には座っているパイプ椅子で打ん殴って半殺しにしてやろうかと考えていたネイサン以外のメンバーだったが、最後の言葉に少しだけ待つ事を決める。

――――それは逆から言えばマトモな意見が出なければ半殺しにする。ということなのだが、ネイサンはそれでも自信満々の表情を崩さずにゆっくりと自分の意見を述べ始める。

「シェミーに今、もっとも足りないもの……。それはまあ、服や生ライブみたいな趣味も足りちゃいないし、スポーツやチアガールみたいな健全な運動も足りない。だけどな、いっちばん足りてないのは……同年代の『友達』ってヤツだよ。俺達は十五ぐらいからは画面内の友達で満足してたが、シェミーは違う。本当は学校とか行って、人並みに友達とか作らないと満足できないんだよ……。あと、恋人とか」

極めて。

というか、唯一のマトモな意見に他のメンバーは目を円くし、し

ばらく思考を停止する。
だが、そんな中でニコラスだけは即刻復帰し、自分の意見も添えることにする。
「なるほど、な……。必要なのは友人と百合展開か……」
極めて。
というか、やはりマトモではない意見に他のメンバーは耳を傾けず、相変わらず思考を止めている。
だが、そんな中でネイサンだけは怪訝そうな表情を浮かべ、反論をする。
「いや待て、俺は百合展開なんて一言も言ってないぞ？」
「……ＨＡ？　恋人って言ったじゃないか」
「なんでお前の中じゃ同性愛が基準なんだ！」
「違う！　同性愛が基準なんじゃない！　でも、女の子は女の子と絡み合ってるほうがイイじゃないか」
「……はぁ、もう何も言わん……好きにしろ……」
ニコラスの変態的思考にネイサンは頭を抱え、話題を投げる。
それを良しとし、ニコラスは自分の意見を述べ始める。
「さて、これからのシェミーだが……。そうだな、やはり……学校に通わせるのが一番だろう」
「……待て、通わせるなら普通の学校は無理だと思うぞ。ＩＳを所持してることがバレれば……最悪『ヤツ等』に居場所を特定される」
「まぁ、そうだろうな……。それに男なんかが住み着いている普通の学校に私はシェミーを行かせる気など毛頭ない」
ジャッキーに指定された事に頷きつつも、自分の意見を変えない

ニコラス。
　そんなニコラスに若干の不信感を抱いた他のメンバーは、各々でニコラスが何を考えているかを探ろうとする。
「……じゃあどうするんだ？」
「まだ分からないのか？　必然的に女子校となっていて、尚且つＩＳを所持していてもなんら疑われない夢の国……」
「ハッ……まさか……！！　ディズニ」
「それ以上言うな馬鹿者ォ！！　『ヤツ等』以上に危険な奴等に特定されるだろうがぁ！！」
　世界の禁忌に触れる呪いの言葉を発しようとした廃ポケ（チャリンコギコギコ）の伝道師をニコラスは殴って黙らせる。
　他のメンバーは考えていたことを違うと言われ、更に悩み始める。
「本当に分からないのか！？　じゃあ更なるヒントだ。……そう、アレは我等が聖地……日本にある」
「……！！　そうか、なるほど……」
「ふん、やっと分かったようだな……エドガー」
「ああ、藍越学園だな」
「……何処……？」
「えっ……違うのか……？」
「いや、何処……？」
　意味不明の名前を挙げたエドガーにニコラスは呆気を取られたが、即座に呆れ、何故ここまで来て分からないのか、と若干苛立ち始める。
「……まさか……」
「おぉ、分かったか？　ジャッキー……期待するぞ？」

「新しく日本に女子校を……！！」
「そんな資金など何処に存在するんだ馬鹿愚か者がァァァァァ！！」
斜め上の発想というよりも、むしろ手前側に飛び出るような発想をしたジャッキーの腹目掛けてニコラスは鋭い蹴りを繰り出し、いよいよもう苛立ちが頂点に達したので、自ら答えを発表することにする。
「ＩＳ学園だ！　ＩＳ学園！！　あそこに入学させればいいだろう！？」
「……あ。そんな単純な答えだったのか……」
「なんだ……苦悩して損したぜ……」
「お前等はドンだけ私の思考がぶっ飛んでると思ってるんだ！？」
「サターンロケット並……かな」
「よーし、通信教育で習った私のガン・カタを披露する時が来たようだ……」
バキバキと勢いよく指の骨を鳴らしながら、ニコラスは立ち上がる。
———ちなみに、この後の戦いは朝まで終わる事はなかったという。
そして、朝には誰もが満身創痍で倒れていたという。

二式　地獄のフライトへようこそ！

朝のシェミハザ機関本部、シェミー・アッシュダウンの部屋。
さすがのシェミハザ機関と言えど、この早朝から施設の最深部に位置するシェミーの部屋は極めて静かである。
まるで全ての時が止まったように、地球が自転を止め、そして公転さえも止めたような静寂の中、シェミー・アッシュダウンは死んだように寝続ける。
その肌の元々の色合いも重なり、呼吸と共に胸が若干上下していなければ死体にも見違えるだろう。
それほどに今のシェミーの存在は脆く、躍動感は死んでいた。
生き物らしさは全く感じさせず、無機質で精巧なビスクドールの如き静けさと、美しさを兼ね備えた体。
一人は『神の造形物と呼ぶに相応しい姿』と呼び、一人は『生気を感じぬ人ならざるおぞましき姿』と呼ぶ。
そんな表と裏の姿を見え隠れさせるシェミーの下に、一人の男が近寄る。
死んだように眠るシェミーは気付きもせず、寝返りもせず、寝言も言わず、手を胸の上で組んだまま死人の如く寝続ける。
男はそんな姿を眺めつつ、シェミーの眠るベットへと腰掛け、ゆっくりとシェミーを抱きかかえる。

「……んぅ……？」

初めてそこでシェミーは言葉のようなものを発し、若干表情を歪ませる。
だが、その表情はすぐ安らぎへと戻る。
男の腕の力強さ、そして同時に与えられる優しさ、その二つがシェミーの深層に眠る記憶を呼び起こしたからだ。

「お父様……」

消え入るような声でシェミーは呟く。

そして、その呟きに連鎖し、数々の暖かい記憶がシェミーの中を駆け巡り、意識を覚醒へと導く。

暖かな記憶の中、シェミーは徐々に世界へと意識を引き戻し、ゆっくりと瞳を開ける。

「お父さ」

瞳を開けつつ、その名をもう一度呼ぼうとして不意にシェミーの口の動きが止まる。

何故か。

それはシェミーの視界に飛び込んだものが原因である。

シェミーの視界に飛び込んだもの。

それは――――。

――――監獄チックなシェミーの部屋に似合わないタコ坊主。

「……」

「お、おう。おはよう。シェミー」

「その命、散らすが良い。暗月の剣の名の下に」

その名はボルゾイ。本名ではないが、別に構わないだろう。

◇

「……アイツ。マジで行きやがったのか」

「ああ、ネイサン。ヤツは行ったよ」

「バカがっ……、全部嘘だったのに……！！　真に受けやがって…

……！！！　朝弱いんだったら超不機嫌に決まってるだろうがッ……！！」

シェミハザ機関の朝は早い。

未だ日が出ているかも怪しいような時間にメンバーは全員目を覚まし、キャリーケースに自分の荷物を積め、一つの部屋の前に集まっていた。

その部屋とは、無論シェミー・アッシュダウンの部屋である。

「まあ……本当にいい奴だったよ……バカだったけど」

「ああ、絵が上手いこと以外何にも取り得がなかったが……いい奴だったな」

「……ネンドール並に好きだったよ、僕は」

リーダーのニコラス、サブリーダーのジャッキー、技術担当の廃（チ）ポケ（ヤリンコギコギコ）の伝道師、機体整備担当のエドガー、医療担当のネイサン。各々が恐らく死んだであろう『彼』に向けて言葉を送る中。

『その命、散らすが良い。暗月の剣の名の下に』

シェミーの部屋の中から地底の呻き声のような声と、凄まじい叫び声が響き、直後。

どぐじゃ、という生々しい音と共に高速で何かが鉄製の壁へと直撃した。

恐らくドアが開いていなければ即死だったであろう。

「がああああ……い、生きてる……生きてるけど……死んだ方がマシぃぃいいい！！」

地面で蹲りつつ、痛みを訴えるタコ坊主。

その名前はボルゾイ。本名ではないが、別に構わないだろう。

「拾って保護してくれたこと、ＩＳを与えてくれたこと……感謝はしていたのだがなぁ、感謝は……」

そして次に、冷徹な声色の呟きと共に真紅の鎧に身を包んだシェミーが部屋の奥から現れる。

その鎧の名前は『傷口箱（スカーレッド・ボックス）』。このシェミハザ機関が唯一有するＩＳであり、また、シェミー専用の機体……つまるところの専用機だったりもする。

ちなみに専用機というのは本来、国に選ばれた優秀なエリートのみに与えられる物だが、無論このシェミハザ製であるＩＳは非公式であり、日の光を不用意に浴びれば蒸発させられるだろう。

表に出（そういった）れない点では持ち主に似た機体とも呼べる。

「まあ、待て。落ち着けシェミー。貞操は無事なんだから」

「黙れよ、亡者が……。貴公等の命の価値もそこ等の愚者の命の価値も大して違わぬのだよ」

未だボルゾイに追撃を仕掛けようとするシェミーをシェミハザ機関のメンバーは全員で制止し、何とか落ち着かせる。

「……はぁー、……次にこんな事があればマジでブチ殺しますよ……っと。っていうか、ヤケに早いわね……まだ……五時？　五時ぃ？　何でこんな時間に……あー眠い、ふざけんなよ……」

クシャクシャと頭を掻き乱しながらシェミーは不満をぶちまけ続ける。

それに対し、ニコラスは若干自信有り気に胸を張りつつ、不貞腐れるシェミーへと話しかける。

「シェミーよ、最近暇じゃないか？　飽きてきてないか？　毎日毎日同じことの繰り返しに飽き飽きしてないか？」
「それよかあんた等の変態的性癖をなんとかして欲し」
「暇だろう？　暇なんだろう？　飽き飽きしてるだろ？」
「いやだからあん」
「そうか、暇か暇か！　飽きたか！」

シェミーは最初から意見を聞く気がないニコラスにうんざりしつつも、決して的を射ていないワケではないので、渋々頷く。
そんなシェミーを見て、ニコラスは長い溜めをいれつつも、つい先日決定した事項を述べる。

「ならば、安心してくれ。シェミーよ。今年より、君にはＩＳ学園に入学してもらうっ！」
「は？」

ニコラスの発言に対し、シェミーは両手を肩の高さまで上げ、小首を若干傾ける『お前何言ってんだ』あるいは『冗談だっての』のポーズを取る。

「はぁ、悪い冗談はやめなさいよ。そんな事を言う為にこんな時間に起こしたの？」
「騙して悪いが本気なんでな……、荷造りをしてもらおう」

ポーズを取っていたシェミーはニコラスの一言で固まる。
そして数秒その状態を維持し、ぐぐぐ……という擬音が似合うほどにゆっくりと振り向く。

「……まさか……そんな……本当だと言うの！？」

「ああ、本当だとも」
「が、学校に通うの？　私が？」
「ああ、通うともさ」

ニコラスの言葉にシェミーは一瞬顔を綻ばせるが、直後に暗い表情をする。

「……いや、無理だろ……この見た目だぜ？　イジめられるのがオチだって……、つーか外出できないし」

自分の腕を指差しながら自嘲気味にシェミーは言う。
アルビノ……先天性色素欠乏症は日焼けやＤＮＡの破壊などの紫外線の与える害から身体を守る『メラニン』が極めて少ない、あるいは欠乏しているために通常の人間が浴びても何もない量の紫外線……つまる所の日光ですら、酷い日焼けを起こす他、先述したように紫外線のＤＮＡの破壊を防げない為に皮膚癌に非常になりやすい。
つまり、日光を浴びることは自殺行為に等しいと捉えれば間違いはない。
ちなみに、他にも視覚にも様々な症状が出るのだが、これに関してはシェミハザ機関が尽力を注いで作り上げた特殊なコンタクトレンズがあるので、説明を省く。

「イジめられるかどうかは分からないが、多分お前の性格なら大丈夫だろう。むしろイジめる側だろ……お前は……。そう、それと外出関連なら大丈夫だ。日光という存在を消し去るかのようにカットし、更には水を浴びても何をされても、セットの洗剤を使わない限り落ちなく、更には塗ってあるか塗ってないかの判断が不可能なほど違和感がない……もはや日焼け止めクリームの領域に収まってるかどうかも分からない日焼け止めクリームがここにあるからな……」
「……どうやって手に入れたのそれ……？　詐欺じゃね？」

あまりにも高性能かつ現実離れした日焼け止めの性能にシェミーは疑うような視線と言葉を送るが、ソレに対してニコラスは自信有り気に答える。

「いいや、詐欺なはずがない……何せ我々が作ったんだからな！」
「さすがシェミハザ機関！　意味が分からない！」
「ちなみにネイサンが一晩でやってくれた」

なんとも仕事が速い人間である。
そして、シェミーはそんな夢のようなモノを作り上げたネイサンに思わず惚れ込みそうになる。

「私……ネイサンのお嫁さ」

シェミーがシェミハザ機関を崩壊させるような５ｔ級の爆弾を投下したところ、シェミハザ機関面々の表情は一気に険しい物となる。

「ネイサン……悪いが、明日から君の居場所ここにないから」

と、ニコラス。

「悪ぃな、ネイサン。楽しかったぜ」

と、ボルゾイ。

「じゃあな、ネイサン。死ね」

と、ジャッキー。

「死ね！　死ね！　シェミーを専有する奴はみんな死んじゃえばいいんだーッ！！」

と、エドガー。

「死ねイサン」

と、廃ポケ（チャリンコギコギコ）の伝道師。

「お前等が何と言おうとシェミーは俺を選んだんだッ！　貴様等の負けだよ！　ハハハハッッ！！」

様々な事を言われたネイサンだが、その表情は勝ち誇った笑みであり、内心でも優越感に浸っていた。

「いや、人の台詞は最後まで聞けよ。私……ネイサンのお嫁さんになりたそうな人が居れば紹介してあげる……って言うつもりだったんだけど……。いや、正直に言わせてもらえば、こっちがぐっすり寝てる間に部屋に入ってきて身体の診察するような奴とは絶対に結婚したくないです。っていうかさ、こっちが眠くて抵抗しないのを良いことにイロイロやってくれたわね、ホント。まあ、それもその夢のような日焼け止めクリームを作るためにやったことなんだと思えば我慢出来なくもないけど。とりあえず一言だけ言わせてちょうだい、死ね変態」

だが、そんなネイサンを蹴落とし、面々の暴走を止めるシェミーの言葉。

そんなシェミーの言葉に二重の意味でネイサンは傷つき、がっくりと地面に膝をつく。

「ネイサン。今度マック奢るぞ」

と、ニコラス

「ネイサン、日本についたら何か一つ買ってやんよ」

と、ボルゾイ。

「ネイサン、今度夕飯奢るぜ」

と、ジャッキー。

「ネイサン、後でバッチ一個あげるよ」

と、エドガー。

「ごめんねイサン」

と、廃ポケ（チャリンコギコギコ）の伝道師。

「……お前ら……ありがとう……。エドガーのバッチと廃ポケ（チャリンコギ）の伝道師（コギコ）の意味不明な略語以外は全部嬉しいよ」

こうして、シェミハザ機関の面々は再びその絆を深めるのであった。実にめでたい。

「……さて、そんなクズみたいな茶番はどうでもいいのよ。で、何だって？　私がＩＳ学園に入学？　あのエロゲ校に？」

「そう、本当なら私達も教員として配属されたいが、何分、免許をもってないもんでね……。残念だがシェミー一人で入学してもらう

よ」
「いや、むしろ嬉しい。あんた等と離れられるなんて最高じゃないの」
「……。まあいい、とりあえず荷造りしてくれ、飛行機の時間に間に合わなくなる」
「荷造り、荷造り……ねぇ。まず愛用のＰＣでしょ、あと衣類。……荷造り終わったんだけど。ダンボール一個に収まったんだけど。ねぇ、これどうなの？　ねぇねぇ。何かイロイロ足りなくない？　ぬいぐるみの一つもないぜ？」
「……日本に行ったら買わせていただくので許してください……お願します……」
「よし、このパイプベットを運んだら許してやる」
「有難き幸せっ……」

といった風に三時間は掛かるだろう、と思われていたシェミーの荷造りは五分で終了し、余った１７５分をどうやって過ごすか……という疑問だけがシェミハザ機関の面々に残ったのは言うまでもない。

◇

という出来事が朝あったワケです。
おはようございます。シェミー・アッシュダウンです。
……誰に挨拶してるのよ、私は……。
まあいいか、ちなみに現在地は空港。国際じゃない空港。違法の香りがぷんぷんするぜ！
「……なんで国際空港使わないの？」
「それはね、シェミー。お前のパスポートと戸籍がないからだよぉおおおおおお！！」

「な、なんだってー！！」

いや、よくよく考えれば普通か……、だって出身地は電気も未だに通ってない未開拓の村。そしてその後は意味不明な変態機関に所属。パスポートも戸籍もないわけだ。

そんな私でも受け入れてくれるＩＳ学園。かっこいー！　惚れちゃいそうだぜ！

「それにしても遅いわね、本当に来るの？　パイロット」

「ああ、来るともさ。実は、私の父親が逆坂重工ってところの社長の友人でね、それでいて、その娘がパイロットやってるらしくてな。今日はその娘さんに厄介になる」

サカザカ重工って、名前からして日本よね……？　なんで知り合いなの……？

あ、ちなみに物凄く今更だけどシェミハザ機関の奴等は全員日本語が標準よ。

どんだけ日本好きなんだよ。

「ちなみ言えば、俺の妹もパイロットなんだが、電話したら『ヤダ』と何も言ってないのに断られた」

ジャッキーが「ＨＡＨＡＨＡＨＡ……」と哀愁漂う乾いた笑い声と共に聞いてもないことを言ってくる。

ていうか、妹居たの？　初耳なんだけど。

「ああ、そういえば私の娘もパイロットなんだが……行方不明でな」

「パイロット率高っ！？　っていうか行方不明って！　というかあんたに娘が……いや、結婚してくれる女性が居たのが驚きよ」

「騙して悪いが養子なんでな、納得してもらおう」

「ああ、なるほど」

養子て、何する気だったんだこの変態。

「……おっと。どうやら来たようだぞ」

とかなんとかバカなことやってると、ニコラスが一声。

私もニコラスが向いている方向を向いてみれば、黒い長髪の女性……というか身長以外は少女と、短いショートカットの茶髪の女性……というか胸以外は少女な二人が此方へと歩いてくる。

「……ねえ、二人いるんだけど」

「……どっちが娘さんだろうな」

日本人なんだろ……？　いやでも、どっちも顔は日本人っぽくねぇ！　ハーフか……。いや、ハーフにしてもどっちもわからん！

どっちだ……？　っていうか近づいてきてだんだん分かったけど……黒い長髪の方の目赤い！　何でだよ！？　髪色からして明らかに色素足りてるだろ！　カラコンか……髪を染めたか……。

茶髪の方は目は茶色……、日本人だとすれば珍しいけど……ハーフならそうでもない。クォーターですら茶色程度ならよくあるし……。

……どっちが『サカザカ』なんだ……？

というか何故二人なんだ？！

とかなんだか思ってる間に件の二人は手と手が届く程度の距離まで接近してきた。

「どうも、本日副操縦士を勤めさせていただく逆坂天名（さかざか あまな）です、どうぞよろしく」

「同じに本日操縦士を勤めさせていただくユディト・ボーデヴィッ

ヒです。ちなみに染髪です」

件の二人は友好的な笑みと共に自己紹介をしてくる。

茶色が日本人だったか……いや、名前からして明らかにハーフだろ。アマナ？　逆坂アマナて。

どこぞの羽生蛇村ニュートランスレーションのあれかよ。

……そして黒髪の方は……ドイツ？　ボーデヴィッヒってドイツだろう。多分。

そして聞いても居ないのに染髪宣言してきやがった。意味が分からない。

「一人と聞いていたが……？」

「あはは、すみませんねぇ。日本に行くって言ったらユディトがどうしても付いて行くってうるさくって……」

「とかなんとか言ってるだろ？　コイツ、操縦面倒だからわたしを呼んで操縦士やらせてるんだぜ？」

「そんなことないだろ。だってお前……ドイツに居場所ないから日本行きたいって言ってたじゃないか」

ニコラスの質問に対し、軽い調子で答える二人。だが、その会話内容はひじょーに危険だと思う。

……本当に大丈夫なの、こいつ等……。

不安になってきたわ……。

「あ、ちなみに安心してください。確かにユディトは問題を起こしすぎて部隊から弾かれましたが、腕前は最高級ですので」

そんな私の心を見透かしたように逆坂天名は私へと満面の笑みで話しかけてくる。

何が安心できるんだ！？　その言葉で！

「チッ、うるさいなぁ。お前だってアレだろ。逆坂重工最近倒産して以来ホームレスじゃないか」
「黙っとけ」

問題を起こした事を言われたのが気に食わなかったのか、ユディトはつまらなそうな声で再び不安になるような事を呟く。
……倒産してるのかよ……。
……ダメだ、こいつ等はダメだ。

「ねぇ、ニコラス。今からでも遅くないと思うの。偽造でもいいからパスポート作って国際空港に行きましょう？」
「そんな大金はないっ……偽造パスポートなんか作る度胸もないッ！」

私の必死の願いに対して、ニコラスは自身満々に答える。
このヘタレ！
しかし……こいつ等はダメだろう。多分絶対ダメだ……。

「ああ、すみませんね、時間取らせちゃって。早速行きましょうか」

い、行きたくねえ……。
絶対他のメンバーも……さすがにこれには乗れないだろ……。
と、思って回りを見渡せば。
全員がジェット機に乗ってるワケですよ。
……なんでだよ！
くそぅ……絶対ヤバいって……これ……。
などと思いつつも渋々乗り込む。怖いなぁ。
乗り込んでみて分かったが。
これはワリと大丈夫かもしれない。パイロットには不安を抱くが、

このジェット機はワリとマトモそうだ。
そう思って最前列の右側へと腰を下ろす。うん、中々の座り心地。
で、次にシートベルトを……、ん？　シートベルト何処よ、これ。
一回席から立って探してみたが、シートベルトらしきものが見当たらない。
……この感じ……イヤだな……。
そして、そんな私の感情を読み取ったかのように操縦席からひょっこりと天名が顔を出す。

「えーっと、すみません、これ逆坂（ウチ）重工の商品なんですけど、シートベルト無いんで注意してくださいね」

そして満面の笑みで欠陥品宣言。
欠陥品だァァァァ！！
まて、これは死ぬ！　絶対死ぬ！　操縦者だけじゃなくて機体もダメだった！！
今からでも遅くないだろ、降りようぜ！？　おい！
と、思って回りを見渡せば。
全員ともリラックスして寝てるんですよ。
……おかしいよ！

「さらっとトンデモない事を言うんじゃない、それよりも……これどうやって動かすんだろうな？」
「操縦法分からないのか！？」
アマナがツッコんだけど。
操縦法知らないの！？　なら何で来たの！？　おかしいでしょ！？
「だって、ＩＳ使えばいいし……」

専用機持ち！？

「お前のＩＳは飛べないだろう」

飛べないＩＳ！？　聞いたことが無い！　いや、それＩＳじゃないだろもう！

「朱嘴鸛（シュトルヒ）なのにな。コウノトリなのにな。なんでだろうな」

「ダイバージェンスが足りないんじゃね？」

「そ　れ　だ」

そ　れ　だ　じゃないわよ……。意味が分からないよ……。

もう、なんか泣きそうだわ……。何なのコイツ等……。

ヤバいよ……。

とかなんとか思いつつコクピット見てみたら、順調に離陸準備が進んでる。

あ、なんだ。操縦法知ってるんじゃない。悪い冗談はやめなさいよ。

「あれ？　動かし方知らないんじゃなかったのか？」

「ああ、だから感でやってる」

感……だと……！？

「やめてくれ、爆発したらどうする」

爆発！？

「わたし達は永遠に結ばれるだろう」

「黄泉の国で？」

「三途の川でビーチバレーやろうな！」
「ユディト、それビーチちゃう、リバーや」
「リバーでバリボーしたらリヴァイブしねえかな」
「するワケがな」
「ファン回しまぁぁぁぁっす！！」
「聞けよ！」
「行きまぁぁぁぁっす！　３．２．１ＧＯ（ガオ）！」

……ああ、何だか遠いよ……ニコラス……ネイサン……ジャッキー……廃ポケ（チャリンコギコギコ）の伝道師……エドガー……あとオマケでボルゾイ……。
なんでお前等は寝てられるんだよ……。そのまま黄泉の国にＧＯかよ……。

「ＹＥＳ！！　空に行けるよ！」
「やったねユディちゃん！　……操縦法分からないのに？」

おいバカやめ……もういいや、もう疲れたよ……なんで私がツッコまなくちゃいけないの……？　おかしくない……？
ああ、地上からどんどん離れていく……。

「わたしにもーただ一つのー願望がー持てるならー♪」
「操縦法ー最初からをー本にしてー窓辺で読むー♪　て、誤魔化すな」

とても意味の分からない誤魔化し方ね。うん。誤魔化したの何かアマナの方だし。
ああ、疲れた。私も寝るかな。うん。

「いけるいける。ＯＫＯＫ。これオマエの所の機体だし、オートパイロットぐらい付いてるだろう？」

あ、なるほど。オートパイロットかぁ。そうだよね、オートパイロットなら安心だね。

「おっと、神は私達を見放したようだ……逆坂重工にそんな技術はない」

「なん……だと……」

だと思ったぜ畜生！　マジで死ぬだろ、これ！？

「ははははははは！　死亡フラグ立ったー！　ＤＥＡＤＥＮＤのフラグ立ったー！　くははははは！　……日記に書かれてないぞこんなのォォォォ！！」

「落ち着け天名ッ！　ラウラ助けてラウラ助けてラウラ助けてラウラ助けてラウラ助けてラウラ助けて……」

いや、お前等二人とも落ち着けよ、と。ラウラって誰だよ……。嫁？

「お前が落ち着け！　せ、説明書……説明書を探すんだ……」

「急いでくれ！　下手に動かすとヤバイと思うと体が動かん！　筋肉が硬直してしまう！」

……普通離陸する前に説明書探さない？　……っていうか、説明書って……。電子レンジじゃないのよ……？

「聞こえる、ユディト？　説　明　書　が　な　い」

しかもなかったッ！　おかしい！

「もっと良く探さんかぁあああああ！！」
「あった跡は見える……だが、これはダメなんだろ？」
良いワケないだろ！？　何なんだよコイツ等！　死んだ……もう死んだよこれ……。
「クソッ……説明書がなくちゃわたしは運転もできないのかよ！」
「もう地面が殆ど見えない……生きて地上に立てるのかこれで……！」
無理に５０ペセタ賭けるわ。うん。
「悪いね、へぼパイロットで……機体だけは、一流のところを見せてやるぜ！」
なんて言葉と共に。グッとレバーを押し倒すユディト。
……なんで勢いに任せてそういうことやってしまうん？
直後、ぐぅっと後ろに引かれる。恐らくはスピードアップしたのだろう。うん。
「ユディィィィッッットッッ！！　何をしたァァァァァ！？」
「フルパワーだぜ！　信じらんねえ！！」
信じらんねぇ！！　じゃないわよ！　こっちのが信じられないわよ！
……あ、ああ。もうだめだ。ああ……。死ぬ前にブーメランで遊びたかった……雪男に会いたかった……。
まあ。
結論から言わせてもらえば……日本には着いたし、ユディト、それに天名とメルアドの交換とかもしちゃったりなんかしたけど。

……二度とコイツ等の操縦する機体には乗りたくないね！

二式　地獄のフライトへようこそ！（後書き）

今回登場したパイロット共はボツになった『ＩＳ≪インフィニット・ストラトス≫～がちがちっ！～』の主人公等だったり。
ちなみにソッチの方だとこの後ジェット機はバラバラに砕け散りました。

三式　織斑との遭遇（前書き）

未知との遭遇。そしてごーるでんへあーろーるらーじちぇすとー星人の襲来。

三式　織斑との遭遇

はろー、シェミー・アッシュダウンよ。
今現在、私はＩＳ学園に居るわ。ニコラス共の宣言通りね……。
「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲはじめますよー」
そして黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任……ＹＡＭＡＤＡ－ＭＡＹＡ……山田真耶先生（先ほど自己紹介をしていた。ちなみに私はこの先生を『ＧＡ』あるいは『サンシャイン』と呼ぶことにする。あるいはワンダフルボディ）。
身長はやや低めで、そこ等の生徒と大して変わらない。しかも服が妙に大きいのもあって本人はますます小さく見える。……妙に服が大きいのは……絶対に妙に胸が大きいからだろう。なんだ……あれは……アサルト・セルか？
あとメガネのサイズもあってない。サイズ選びが下手なんだろうか。
……。
……。
つーかね！？　そんなロリ巨乳の先生なんてどうでもいいんですよ！！
問題点はそこじゃねぇんだぜ！？
一番の問題点はな、そう！
中央の最前列に！
前にッ！
男が居るんだよッッ！！
……ああ、追記しておけば、ここはＩＳ学園。可愛そうなお友達が沢山いる所だ、君も一度は行ったことがあるだろう？　……ない

か。
あと可愛そうじゃなくて可愛いか……、あとチャー研再放送おめでとう。
で、話を戻すけど。
ここはＩＳ学園。ＩＳの何たるかを学ぶ場所であり、ＩＳを操縦できない男は入ることは絶対に許されない！
つまり、必然的に女子校と化しているのだっ！
なのに、男がいる。と……。
意味が分からない。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」
「……」

ああ、何か真耶先生が言ってたらしいけど聞いてなかった。よって反応できなかった。
……だって男なんだぜ！？　あ、いや。真耶先生がじゃなくて、最前列の中央が。
おかしい、これはおかしい……。
とか何とか思いつつぼーっとしてると、自己紹介が始まる。
……来たか……学園生活の今後殆どを決める自己紹介。別名『最速なる審判者（ハリィ・ハリィ・プリィズ・ジャッジメント・ミィ）』
ここでマトモに答えられない奴は根暗としてぼっちとなる……、ひゃあ、恐ろしいぜッ！
とか思いつつ『自己紹介をお願します』『特に無い』『では、お名前は？』『無い』『ありがとうございましたー！』とかそういうやり取りないかなーとか思ってると、件の最前列中央の男……そう、ＯＴＯＫＯへと番が回ってきた。
奴は……いったい何者なんだ……。

「じゃあ、次に織斑(おりむら)くん。お願いしますね」

織斑……だと……？　まさかあの……伝説のＮＩＮＪＡウォーリアの生き残りと言われる……。

いや、知らんけど。難しい字書くんだろうなー。

……などと思っているが、一向にＭｒ．織斑の声は聞こえない。

どうやら順番が回ってきたことに気付いていないようだ。

あるいは……死んでいるか……。

「織斑くん……？　織斑くん。織斑一夏(いちか)くんっ」

「は、はいっ！？」

一度名前を呼ばれても件の織斑は反応を示さなかったが、数回呼ばれると勢いよく返事を返した。どうやら生きているようだ。

それにしても、何を考えていたんだ……？　いや、エロゲの主人公のようなポジションなんだから考える事は一つか。

クラス全員孕ませるとか、そんなことだろう。きっと。あるいはサボテン。またはラーメン。

というか、一夏って名前なのね。一夏……進化したら千夏(ちなつ)になるの？　あとそれと千冬(ちふゆ)とか、千秋(ちあき)とか、千春(ちはる)とか……。

イーブイかお前は。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？　怒ってるかな？　ゴメンね、ゴメンね！　でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？　自己紹介してくれるかな？　だ、ダメかな？」

無視されたのを機嫌が悪いから、と妙な解釈でもしたのか、真耶先生は若干焦り気味に織斑一夏へとペコペコと頭を下げる。

……今この世は教師が生徒に媚を売る時代と言うが……こういう

ことか……。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？　本当ですか？　本当ですね？　や、約束ですよ。絶対ですよ！」

えーっと、この先生は……社会で生きていけるのだろうか。社会と言う荒波に飲まれてももがけるのだろうか……？

なんて軽く考えてしまうほど我等がまやっち☆は弱弱しいわね。

……まやしぃ☆？　いや、何か違うな……。何処となく似てるけど。主に胸とか。

なんて考えてると、件のミスター織斑が立ち上がった。

立った！　オリムが立った！

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

……うん。

そんなのは知ってるんだよ！　もっと違うこと紹介しろよ！　趣味はサボテンの株分けで好物はサボテンです、サボテンの葉っぱを生でかじるのが好きなんです！　とか！

……イグアナ？　いや、イアグナだったっけ……グラエナ……？

「……」

そして沈黙する教室。……窓の外を見れば一面桜が咲いた美しい光景。夜景とコンクリートしか見たことのない私からすれば物凄く感動的な光景ね。……これが春か……。

春……沈黙する教室……まさに沈黙の春っ。

そして、何か言え！　織斑一夏！　何か言ってみろ！

「以上です」

だが、織斑一夏は何も言わない。……つまらない男……。

オリムの意気地なし！　……大体なんだよオリムって、カリムみたいな名前しやがって！！　ロートレクなの？　オズワルドなの！？　エへへへへへェッ→なの！？　字幕で『ウフフフフ』て表記されてるのに『エへへへへへへェッ→』なの！？

……全く関係ないけどＡＣＰＰのｇｒｉｐってイイと思わない？

え？　知らないから教えろ？　いいか、俺は面倒が嫌いなんだ。……まあいい、面倒だが教えてやる。ｇｒｉｐってのは面倒が嫌いなスティンガーさんの曲よ。面倒だね。うん。

……とまあ、本当に全く関係ない事を面倒ながらも考えていたところ。

「あ、あのー」

真耶先生が若干涙ぐんだ声で織斑一夏に話しかけている。失敗したな、織斑。お前終わったぜ。

織斑一夏も織斑一夏で何か知らんけど「あれ？　ダメッスか？　え、ちょっ。ダメッスか？」みたいな顔してるし。

ダメに決まってるだろー、せめて好きな下着のガラは水玉ですとか……。何だその変態的自己紹介……。

……なんか私もシェミハザっぽくなってきたなぁ……。はぁ、死にたい。

とか何とか考えている間に、件の織斑一夏の背後へと黒のスーツにタイトスカートを着こなした長身の女性が近づいている……。

しかも名簿の縁を下にして高く振り上げている。

……殴るの？　殴るのか！？　殴ってしまうのかぁーっ！？

「いっ――――！？」

パアンッ！！　と轟音。

殴ったぁぁぁぁぁーっっ！！

そして痛そうだなー。私の頭なら間違いなく細胞が一億は死ぬわね。

「……」

ぐぐぐ……という擬音が聞こえてきそうなほどゆっくりと織斑一夏は振り向き……背後の人物を確認する。

すらりとした長身、よく鍛えられているが決して過肉厚ではないボディライン。組んだ腕。ちょっと強いワンコ（つまるところの狼）を思わせる吊り目。

げぇっ、アルトリウス！？

「げぇっ、関羽！？」

似たようなこと考えてた。いや、アルトリウスがどういった感じか知らないけど。

……そして再び全く関係ないけど、灰色の大狼シフ戦は大いに盛り上がったわ、十八戦目で勝てそうになった時は酸欠で死に掛けたもの。そして、死にそうでアルトリウスの大剣を振ろうとしても思うように触れないシフを見て胸が締め付けられたわ……。一瞬倒していいのかどうか迷ったわ……。大発火で燃やしたけど。

などと思っていると再び『パアンッ！』と轟音。

打った！　二度も打った！　オリムは親父に打たれたこともないのに！　いや、知らないけど。

ちなみにすごい音だから女子達は軽く引いている。私も引く。

スクラップ&スクラップ！　全てをぶち壊す！

何がぶち壊されてるかは一目瞭然！　エロゲ臭い高校に何らかの因果で入学出来たならハーレムが待ってる！　っていうオリムの幻想だっ。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーン低めの声。……お、恐ろしい……これがいわゆる『戦慄』ってヤツか……初めて味わったぜ……。

……ワンダフルボディ先生が副担任ってことは、恐らくこの先生がこのクラスの『主担任』なんだろうなぁ。いやだなぁ、こわいなぁ。

しかしまあ、オリムも中々に面白いヤツね、背後から殴ってきた見ず知らずの先生に『げぇっ、関羽！？』て、物凄い度胸よ。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

どうやら、あの恐ろしい先生の苗字は織斑と言うらしい……。まさか……姉弟……だとでも言うのか……？　姉弟だろうなぁ、親子ってのは無理あるし。

よし、ならば恐らくあの姉の名前は千夏だろう。うんうん。ソレできっと次女とかに百夏（ももか）ってのが居るんだぜ？　で、三女に十夏（とうか）。……サマー家族……ッ！？

長女、千夏。次女、百夏。三女、十夏。長男、一夏。……両親はきっと夏夫と夏美。

あぁ、なんて暑い家族なんだろうか……。

きっと苗字は松岡ね。

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

などと昼ドラとかにでもありそうな設定を考えていたところ、先ほどまでの涙声が嘘のように真耶先生は熱っぽい声と視線を千夏（仮）先生へと送っている。しかもはにかんでるし。

え？　何？　有名人？　外人？　歌？

「諸君、私が織斑千冬（ちふゆ）だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

千冬だったか……サマー家族崩壊。無念。

……っていうか、私は後二ヶ月で十六歳なのだけど。正確には六月十二日。

まあ、いいか……正式な技術は無いとはいえ、私にはシェミハザ機関に捧げた五年間があるわ。

……そう、厳しい五年間だったわ……、百もの戦艦を近接装備のみで全撃破したり……、五機の量産型ＩＳを同時に相手したり……。

……あれ……なんで私はこんな奴らと戦ってるの？　おかしくね？　シェミハザ機関は何と戦ってると言うの？

しかもよく思い出してみれば相手は何なのか聞いたら上手くはぐらかされてるし。

陰謀の香り……陰謀の香りがするわ……。

ちなみに一番キツかったのは中国の蛇腹剣使いの英（エイ）・風勝（フォンショウ）だったわね……、まさかＩＳでの戦闘が終わったからって生身での戦闘に入り込むとは……。

通信教育でガン＝カタと我流剣術……そして空手を習得して無かったら今頃食われてたわ……無論食物的な意味で。

中国は何でも食べるからね。

……食べるといえば某世界で最も美しいグロと呼ばれる彼女ね。

うん。血管住宅。
分からない人は『沙耶の唄』って調べてみて、今すぐに。
とか何とか私が思っていると、急に黄色い声援が響いた。……ところで黄衣の王って知ってる？　あ、知らない。そうですか。

「キャ――――――！　千冬様、本物の千冬様よ！」
「ずっとファンでした！」
「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！　北九州から！」

物凄い声援だ！
……え？　織斑千冬は有名人？　まあ、私は生まれてこの方テレビをビデオ１、ビデオ２、ビデオ３以外で使った事が無いから知らなくて当然か……。
それにシェミハザ機関に置いてあったＰＣはネット繋がらなかったし。
……おかげ様でデジタルにおける画力は極めて上昇したわ、とりあえずボルゾイ以上には。
ちなみに私の傑作はゲルニカを萌えキャラ化させたもので……やめよう、あまり良い話じゃないわね。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」
「私、お姉様のためなら死ねます！」

きゃいきゃいと動物園のメス猿のごとく騒ぎ立てる女子達を、千冬先生はかなりうっとうしそうな顔で見ている。
弟は男でＩＳ乗れる（のだろう）し、姉は有名人。
どうなっているんだ織斑家！　意味が分からないぞ織斑家！　織斑の斑って感じが班って字と似てるぞ織班家！

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられ

る。それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

こういうのって酷いよね。

だって思わず引き気味で硬直してる私まで馬鹿者扱いなんだもの。

酷いや。

しかしまあ、何とも凄いヤツだぜ、アレだけの人気を投げ捨てるとは……。

これで喜ぶような奴は恐らくシェミハザレベルの病人だけね。

「きゃあああああっ！　お姉様！　もっと叱って！　罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躾をして～！」

シェミハザレベルだった。Ｓ５よＳ５、そのうち喉掻き毟って死ぬんじゃない？　コイツ等。

もうドン引きですよ。ドン引き。

ああ、ヤダヤダ……なんでこんな学校に私は居るんだろう……。

「で？　挨拶も満足にできんのか、お前は」

そして件の織斑千冬先生は話の流れを一刀両断して（恐らく）弟の織斑一夏へと厳しい視線を送る。

……やっぱあれか、サボテンの話しなかったから……あわわ……。

「いや、千冬姉、俺は――――」

はい、パアンッ！　本日三度目でございます！

どうやら織斑一夏は相当バカなようだ！　例えば母親が通っている学校の教師だからって『母さん』と呼ぶような奴が何処に居るか

！　普通苗字＋先生だろ！
うんうん、リアルでは学校一回も通ったこと無いから分からないけどね！
でもしかし、数々のエロゲで数多の学校を歩き回ってきた私は恐らく間違ってない！
ちなみに私がプレイしたエロゲで一番ショックを受けたのは最初に『この物語の登場人物は全て十八歳以上です』とかなんとか書いてあったのにプレイして即効で『私は１４歳！　中学２年生』とかいうテキストが流れたことかしらね。
……クリスマスプレゼント？　まりもちゃん？　知らん。
でも興味持った人は『螺旋回路　クリスマスプレゼント』で調べてみたり『まりもちゃん　頭』で調べてみると幸せになれるかも！
……かも！

「織斑先生と呼べ」
「……はい、織斑先生」

やっぱり調べないほうがいいわ、絶対にやめたほうがいいわ。うん。
……頭を摩りながら織斑一夏は小さい声で返事を返す。
情けないぞ！　織斑一夏！　でもがんばれ！　織斑一夏！

「え……？　織斑くんって、あの千冬様の弟……？」
「それじゃあ、世界で唯一男で『ＩＳ』を使えるっていうのも、それが関係して……」
「ああっ、いいなぁっ。代わってほしいなぁっ」

どうやら先の会話で織斑先生と織斑一夏の関係に気付いたらしい女子生徒は更に騒ぎ立てる。
……いや、織斑なんて苗字そうそう居ないんだから自己紹介の時

点で気付くでしょ……普通……。
あ、でももしかしたら……実は織斑は佐藤並によくいる苗字なのかしら……。
ちなみに私が思うに田中よりも梶山の方が多いわ、多分。
とか思っていると、チャイムが鳴り響く。
「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で身体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」
いや待てよ、カ行以降の自己紹介は！？　ねえ、私の自己紹介は！？　え、待ってよ！　見た目でハンデあるのに自己紹介できなかったら確実に私ハブられるじゃないのさ！
……もうやだ。泣きたい。

◇

キングクリムゾンッ！　時間を吹き飛ばすっ！　先輩魔法少女の頭も飛ぶっ！
はっ……一体私は何を！？
という茶番を交えつつ二時間目後の休憩時間。
一時間目と一時間目の休憩時間、そして二時間目はどうしたかって……？
時間ごと吹き飛ばされたわ。南無。ちなみに要約すると一時間目はクソつまらない一般常識の話。一時間目の休息時間は織斑一夏がジャパニーズサムライガールに連れてかれた。そして二時間目は山田真耶先生が妄想に浸っていたわ。
……Ｏｈ、全部表せた。
……さてさて……二時間目の休息時間……。目標である織斑一夏

へと接近する影は一つも無い。よっしゃ！　チャンス！
別に何するわけじゃないけど何かしたい！　無性に何かしたい！
もう服を脱ぐのだっていいわ！　なんかやりたい！
……学校って……退屈なところなんだね……ワトソン……。

「へェイ、Ｍｒ．オリムぅラ！　チョットお話しまセンかー？」
「ちょっと、よろしくて？」
「へ？」

……無駄に片言で迫って反応を見ようと思ったが、横からやけにキレいな日本語を話す金髪ロールが現れたことで失敗に終わった。
なんだよ……この金髪ロール……首から上飛んで死ねよ……。

「……なんなんですの？　あなた」

金髪ロールがこっちを鬱陶しそうに見てきた。
……え、何？　これ私が悪いの？　いーや悪くないね！　よっしゃ、この金髪ロールで穴埋めだ！　織斑一夏を困惑させられなかった分この金髪ロールをイジくるぞ。
異論は認めん。

「……で、織斑一夏。訊いてる？」

さっき金髪をイジくると言ったな。
あ　れ　は　嘘　だ　。

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ？」

どういう用件か……。
別に何も無いんだよな……。

「えーっと……アレだアレ、うん……本当に男なの？」
「いや、まあ……」
「じゃあ何でココに居るの？」
「俺自身にもよくわからん……」
「なら網パンと縞パンどっちが好き？」
「無地……って何答えさせてるんだよ！？」

無地好きとは……、純情だな。

「なら残念ね……今日の私はスパッツだわ……」
「訊いてねえよ！？」
「ところで私のスカートの下、見る？　それとも鑑賞する？」
「同じ意味だろそれ！」
「ハイどうぞーッ！　シェミー・アッシュダウン様の水色と白のストライプ、とくとご覧あれぇい！」

言葉と同時に私は元から短いＩＳ学園の制服（恐らくデザイナーは普段萌えキャラとか書いてる）のスカートを自分で捲し上げ、中身を露にする。
恥ずかしいかって？
ちげぇなあ……パンツを見られるのが恥ずかしいんじゃないんだよ……。
そういう雰囲気が恥ずかしいんだよ。

「赤と白じゃねえか！」
「しっかりと見てるじゃねえか！　この変態！」
「そんな至近距離でやられたらどうやっても視界に入るだろうが！？」
「だがしかぁし、ココでもう一度スカートを捲りあげるとォッ……

！！」

言葉と同時に再びスカートを捲し上げる。

「黒のショーツに代わった……だと……？」

「やっぱ見てるじゃないの、この変態！」

「だから見えるんだっての！」

……なんだこのコント。

金髪ロールは目を丸くしてるし。若干頬染めてるし。

だけど、私は私で何だかテンション上がってきたわァ！！

もう全裸になりたい。

「ちなみにもう一度捲るとノーパンになってるわ」

「やるな！」

……実は二枚履いていたっていうオチなのよ。何で履いてたか？

このネタを誰かにやりたかったからよ。

ちなみに当初の目標は山田先生だったり。

さて、この抜群の芸のお陰で織斑一夏と打ち解けることに成功したわ、何を聞こうかしら。とりあえず性癖聞くかな。

個人的には無理矢理にやるのが結構好きそう。壁に両手を押し付けて、無理矢理キスしてみたり、そのままの無理矢理な体勢で挿入とか。

それは私の性癖だけどな！

「ちょ、ちょっとお待ちなさい！」

と、ここで。

また金髪ロールが突入してくるわけだわ。

……ええい、自己中め……。

「あなたは一体何なんですの！？　いや別にどうでもいいですわ！
黙っていてくださらない！？」

落ち着け金髪ロゥル！　日本語がめちゃくちゃだぞ！
でもまあ、コイツを黙らせて織斑一夏と何かを喋ろうとは思わないしなぁ。うん。
ここは素直に譲ってやるか。展開によっては金髪ロールをイジろう。面白そうだ。

「あなたもあなたですわ！　織斑一夏！　このわたくしに話しかけられたというのに無視するなんて……信じられませんわ！」

信じなくても、信じても、関係ない。これが現実だ。
……いい台詞だ……いつか使いたいわね。
しかしまあ、こんな高飛車女……極めて珍しいと思っているそこのあなたッ！！
こういうタイプの女は今この世では珍しくないっ……、何故ならＩＳが世界最高の兵器となり、軍事バランスを握るこの世に置いてはっ……ＩＳを動かせない男はクズ、いや、それ以下の存在だからだァーーーーッ！！
まあ、私は劣等種だからそこまで付けあがれないけど。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

私も知らない。だが黙っておく。だって黙ってろって言われたし。
うん。私いい子。

「わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリ

スの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

イギリスの代表候補生だとッ！？　我が国のホープじゃないか！

……我が国のホープこれかよ……もっと……こう、『ノブレス・オブリージュ』的な方は居なかったの？

イギリスも腐ったな。

苗字だけはおとなしそうなのに……。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「貴族？　貴族ぅ！？　あはははははははっっ！！　ないわ！　いや、絶対無いわ！！　ありえないわ！　あはははっ！！

何ソレ？　流行のジョーク？　傑作じゃないの！」

「だからあなたは何なんですの！？　もう少しでいいから黙っていてくださらない！？」

「はいはい……所詮アルビノで劣等種の私に発言権なんてありませんよ……」

あまりにも面白いジョークだと思ったら本気だったらしい。厨二病かっての……。

「……で、質問なんだが……代表候補生って、何？」

がたたっ、とクラス内の数名の女子がずっこけた。……体張るなあ……。

「織斑一夏、代表候補生ってのはあれよ、国の実験モルモットよ」

「そう……なのか……？　なんか可愛そうだな……」

「でしょう？　ちなみにそれを誇りに思っている金髪ロールは頭ン

中薬でグチャグチャに掻き混ぜられた挙句様々な薬品を投与されて……」
「違いますわよッ！！」
……えー？　違うの？　こんなエロゲ的展開が起こるような世界なのにぃ？
そしてエロゲに夢を抱く少年達よ、心しておけ。
暖かいエロゲと同数だけ冷たいエロゲが存在することを――――萌え萌えらぶらぶちゅっちゅなシナリオの裏には必ず欝シナリオが隠れていることをッッ！！
どんな初心者向けのヌルいエロゲでもＣＥＲＯランクＤのノベルゲーぐらいのグロはあるのを覚悟しておけ……！！
「それよりも織斑一夏っ！　あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」
「織斑一夏はどうか知らないけど私は本気だぜ！」
「あなたは黙っていてくださらない！？　というか日本語通じてますの！？　意味理解できてますの！？」
「できてるので黙りますよっと……」
そんなカリカリしなくてもいいじゃないの……。
「で、織斑一夏、あなた本当の本当に知りませんの！？」
「おう、知らん」
実を言うと……私もあまり良く知らないっ☆てへぺろっ☆
「……」
どうやら金髪ロール……セシリアは賢者タイムに突入し、冷静に

なったようね。
熱しやすく冷めやすい……か、いい奴ね。
「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……」
「大丈夫よ、織斑一夏！　こんなこと言ってるけどイギリスなんて電気が未だ通ってない村が存在するから！」
「……マジか……？　でも何で知ってるんだ？」
「私の故郷なのよ、そこ」
「マジかよ……」
マジだよ。
「で、代表候補生って？」
……あれ、遂に織斑一夏の反応まで薄くなってきた？
「国家代表ＩＳ操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。……あなた、単語から想像したらわかるでしょう」
「そういわれればそうだ」
「なんだ……代表の候補生ってことは……他にも数百人ぐらい居るんじゃない？　だとしたらそうでもないじゃないの。国代表のサッカー選手のがまだ誇れるんじゃ……」
「それもそうだな……」
「そこ！　玉遊びと軍事を一緒にしないでくださらないっ！？」
また黙らせられた、酷いよ。そして玉遊びて。ＩＳだって弾遊びじゃないのさ。
私の場合は棒遊びだけど。……やだ……物凄く卑猥……。

「……そうですわ……、そう！　エリートなのですわ！」

再起動だと……盛り上がってまいりました！

ビシィ（決して某公式ネタキャラの彼女のあだ名ではない）！

と織斑一夏に向けた人差し指が鼻に当たりそうなくらいに近い。

ポーズ取るねぇ。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だって言ったんじゃないか。……なあ？」

「ねー？」

織斑一夏が同意を求めてきた。

凄い！　セシリアのおかげで織斑一夏内で私への友好度がグングン上昇するわ！

やったね！

「大体、あなたＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「ふん、まあでも？　わたくしは優秀ですから、あなたのような人間に優しくしてあげますわよ」

おおすげぇ、やさしい。どっかのチュートリアルが全く無いのに

超難解な鬼畜ロボアクションゲーとは大違いね！

「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「……織斑一夏、こんなヤツに頼ることないわよ。我流で良ければ私が教えたげるわ……こう見えても私、ＩＳが公表されてからずっとＩＳに乗り続けてるの。そう……約五年くらい？」

五年くらい……よね。五年ね、初めて乗ったのが十歳の誕生日だから……、ああ、あと二ヶ月で五年か。

しかし……最初はマジでビビったわね、だって傷口（コレ）箱なんか放ってるオーラっていうか覇気が恐ろしいんですもの。

今ではもうすっかり慣れたけどね！

「はぁ……、どうしてあなたはそこまで易々と見抜けるような嘘を吐きますの？」

「はい？　今何と？」

え、嘘？　私なんか嘘言った？　いや、嘘ばっか言ってた気がするけど……。

「ですから！　何故そこまで分かり易い嘘を吐くのかと聞いていますの！」

「……どの嘘？　嘘ばっかりで分からないわ」

「操縦暦の話ですわよ！」

ハイ。

……はい？　私の操縦暦が嘘……だと……？

何言ってんだこのアマ。

「……何を根拠に嘘だと？」
「根拠も何もありませんわ。……まあ、言うならば五年間もＩＳを操縦しているなら入試試験で教官に勝利するのが普通ではなくて？　普通ですわよね。それなのに？　教官を倒した受験者は、唯一！　私だけ。コレで十分かしら？」

こいつ……っ、論破厨かっ……！　くそっ、油断した！
しかし……。
あー……。
あーあー……。
可愛そうなセシリア。今から大恥掻くことになっちゃうぞー。
可愛そうに、可愛そうに！

「はぁい、はいはいはいはい……なるほどねぇ、んまぁ、私は教官倒してないわよ。だって、今更私の腕前なんて見せる必要がないもの」
「……は？」
「つーまりー……私はですねぇ……、筆記試験しかやらずに入学してるんですねぇ！」
「ハァア！？　な、……それこそ嘘ですわ！　ありえませんわ！」
「だが、在り得る……。私の戦闘を人工衛星の長距離録画で録画したものを予め送っておいたのよ」

ちなみに戦闘内容は日本の代表的な量産型ＩＳ『打鉄』三体と現在トライアル中のＩＳ『ミナーヴァ』との乱戦よ。
ミナーヴァはやばかったわ……装甲は紙だったけど、機動力、エネルギー効率……そして、それに加えて超高度演算による未来予知が厄介だったわ……。
もうほんとに、アレの時は死ぬかと思った。人食い英風勝の時並

に焦った。

「し、信じませんわよ！　絶対に！」

「信じなくても、信じても、関係ない。これが現実だ」

ワリと早くこの台詞使えた！　やったねシェミちゃん！

「な、な、なっ――――！！」

「ところで話の腰を折ってしまって悪いんだが、入試って、あれか？　ＩＳを動かして戦うってやつ？」

「～っ！！　……そ、それ以外に入試などありませんわ」

え？　筆記試験なかった？

あ。

その程度、入試にも含まれないと。そうですか、そうですか。

というか、織斑一夏、ナイスタイミングだぜ……。

「あれ？　俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

「す、すげー！　織斑さんマジパネェッス！　残念だったな、セシライ！」

「セシリアですわよ！　何ですの！？　セシライって！　……それよりも、わ、わ、わたくしだけだと聞いてましたが？」

セシリアもセシライも変わらないじゃないですか……。

ローマ字に直してもＳＥＳＩＲＩＡとＳＥＳＩＲＡＩ。

ほらＩとＡの位置が入れ替わっただけじゃないの。

「女子ではってオチじゃないのか？」

ビシィ（決して妄想癖がヤバい某ゲームの血まみれヒロインを指す言葉ではない）という音が聞こえた。
あ、これはキタわね。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」
「いや、知らないけど」
「あなた！　あなたも教官を倒したって言うの！？」
「おーい、セシリア。口調崩れてるわよー！」
「だまらっしゃい！　で、どうなんですの！？」

あ、直した。

「うん、まあ。たぶん」
「たぶん！？　たぶんってどういう意味かしら！？」

物凄い剣幕で迫るセシリア。お、おおぅ。あぁん凄ぅい……。
というか。
フルパワーだぜ、信じらんねぇ！！

「えーと、落ち着けよ。な？」
「こ、これが落ち着いていられ――――」

キーンコーンカーンコーン、と。
まるで狙ったかのように。セシリアを撃墜するかのように美しいタイミングで三時限目開始のチャイムが鳴り響く。
今の私にはエヴァンゲリウムに聞こえる。ちなみにこれは現実の話。英語で言えばリアル話。

「っ……！　またあとで来ますわ！　逃げないことね！　よくって！？」

言うだけ言ってセシリアはさっさと帰っていく。私も席に着くか……。

「まあ、次も来るけど、構わないわよね？」

「おう、大歓迎だ」

……ファーストコンタクトはセシリアを生贄に捧げることで素晴らしい物になったわ……！！

ありがとうセシリア。私、あんたのこと……嫌いじゃなかったよ。

四式　クラス代表といえば（前書き）

１００Ｍ走の選手ですよ。まったく……。

※大幅に改編しました。

四式　クラス代表といえば

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目を終え、三時間目。

今回の授業内容も先と同じく、私が五年前に通った地点の内容。

いやいやぁ……私の脳が普通なら復習大歓迎なのだけど、忘れないしなぁ……。

つーかね、正直言ってこれ拷問よ。

私はご存知の通りアルビノでしょう？　だから最近までは午後七時に起きて午前十時に寝る生活ばっかだった（日本に来てからはなるべく直そうとしてるけど）から、この時間帯はひじょーに眠い。

でも寝たらアレじゃない？　なんか、殺されそうじゃない？　主に織斑先生とか織斑先生とか織斑先生とかに。

頭グシャアてされそうだもの。うん。

あ、織斑先生と言えば、今何か教卓に立ってるわね。山田先生ノート手に持ってるし。……そこまで重要かね、各種装備の特性。

……。

え？　時差？　いやいや、違うのよ。ほら、時差があっても月見ると眠くなるじゃない？　それと一緒よ。日光浴びると眠くなるの。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

……と、思っていたが。

ふと思い出したように織斑先生が言う。

クラス対抗戦……代表者……ああ、あれか。１００m走の選抜メンバーとかね。なるほど。

私は一応こんなナリでも（自分でもかなり不思議だが）体力と瞬発力は結構あるわ。
こんなナリなのにね。骨若干浮き出てるのにね。人体って不思議！　ファンタスティック！

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。
……そりゃざわめき立つわ……、なんで１００ｍ走の選手やるだけじゃなくて学級委員みたいなことやるの？　おかしくね？　え？
それ足の速さで決めるトコなの？
……日本ってぇのは奥が深ぇぜ……。
リレーだけなら立候補して目立とうかと思ったけど、私は面倒は嫌いなんだ。
絶対になりたくない。うん。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

おお、やっぱり、っていうか絶対推薦されると思ったわ。うん。
まあ、足速そうよね。結構鍛えてる感があるもの。

「私もそれが良いと思います！」

更に推薦。織斑一夏押すなぁ、このクラス。
まあ、織斑一夏ってなんか陸上部とか入ってたような感じだし、大丈夫でしょ。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

他薦はともかく自薦て……セシリア・ウォルコット以外しなさそうじゃない……。あれ、セシリア・オルコットだったかしら？　っていうか発音の問題よね、つまりどっちでも正解。わぁ、私って天才！

他の奴等とは目の付けどころが違うぜ……。

「お、俺！？」

と、いきなり立ち上がった織斑一夏。

え、今まで違うと思ってたの？　織斑って言われてる上に『くん』付けされてるんだからお前以外ありえないだろ。バカなの？　この人実はバカなの？　やばい、もしかしたらコイツよりセシリアさんのがマシかもしれない。

っていうか、セシリアさんは真っ先に自薦しそうなのにしないのね。

……やっぱり、あんなにデカイ胸部スタビライザー付けてたら走れないか……。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？　いないなら無投票当選だぞ」

「ちょっ、ちょっと待った！　俺はそんなのやらな――――」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも――――」

諦めの悪い男だぜ、まったく。

と、織斑一夏が未だに続く織斑反論を、突然甲高い声が遮った。

「待ってください！　納得がいきませんわ！」

バンッと机を叩いて立ち上がったのは、我等期待の星、セシライ・ウォールケンさん！

……ん！？　間違ったかなぁ……。

っていうか自薦した！　やめろセシライさん！　その胸部スタビライザーは某貴族の羽根型スタビライザー並に機体負荷が高いぞ！！　そんなの付けて走るなんて自殺行為だ！

「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

あ、セシリア・オルコットか……でもウォールケンはまだしも、セシライはＳＥＳＩＲＩＡとＳＥＳＩＲＡＩ……ＩとＡが入れ替わっただけだから別に大丈夫よね。

……これ、さっきの休み時間にも言ったような気が……。気のせいか。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！　わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

えぇ！？　セシリアさんは……速いのか、足……。嘘でしょ……。

というか、そのプロポーションで１００ｍ全力疾走って……確か、ＩＳ学園は未だにブルマを使用してただろうし……。

あ、サーカスじゃなくて、そういう……こう、好きな人には溜ま

らんモノをやるつもりでらっしゃるのね。
セシリアはエロいなぁ。

「いいですか！？　クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」
「いや、さすがにそれはない……私のが上だと思うわ」

あんたより私のが有利よ。胸的な意味で。
……て、しまったァァァァァァァ！！
思わずセシリアの意味不明な自信にツッコんでしまったァァァァ！！
だって、仕方ないやん。そんな胸部スタビライザー付けて走れるワケがないんだもの。

「んなっ！？　……またあなたですの？　あなた、少々自信過剰ではなくて？」
「いやいや、それは無いぜ。なんせ私は自己最高タイム９秒６１だぜ？」

聞いたか私の自慢の最高タイム！　ウサイン・ボルトも真っ青だぜ！
やっぱＩＳとか止めて陸上とかに出ようかしら。そっちのが活躍できる気がする。うん。
周囲の生徒達も目を丸くして此方を見ている。そうだろうそうだろう、速いだろう速いだろう。
……ていうか、私の歩幅でこの速さ。足が更に長くなればボルト抜けるんじゃね……？
いや、そこまで身長高くなりたくないけど。……何故って？　上目づかいができなくなるじゃないのさ。
上目づかいは重要よ。これがあるとないでは大きな差が出るわ。

……何にかって？　そんなの……媚を売るため？
などと思っていればセシリアが此方を呆れたような目で見てくる。
「……は？　秒？　……あなた、何の話をしてますの？」
「んぇ？」

え、１００m走の話だけど。
何か間違った？
そして回りの沈黙。
ん！？　間違ったかな……。

「……あれ！？　織斑先生！　今１００m走の代表選手の話よね！？」
「国に帰れ」
「あれぇ！？」

帰れて。イヤよ、またあの二人の操縦するジェット機に乗るなんて。
あー……そういえばユディトと天名は元気かしら……自爆テロとかやってなきゃいいけど。
じゃない、そんなのどうでもいい。っていうか、あの二人はさっさと死んだほうが世のためだと思う。真摯に思う。
で、結局何の話なの？　え？　っていうか、今のが教師の言葉？
訴えますヨ？

「えーっと、アッシュダウンさん？　今、クラス代表の話だよ？」
「ええ、知ってるわよ。クラス対抗戦のクラス代表でしょ？」

何を今更なこと言ってるんだコイツは。
アレか、私が日本語わからない人とでも思われてるのか。

ナめんなよ！　伊達にシェミハザやってないんだからさ……、年季が違うわ。

「私、知ってるのよ？　日本でクラス対抗戦と言えば１００ｍ走だってコトぐらい……」

「あー……アッシュダウンさん……」

女子生徒が救いようのない奴を見るような目でこっちを見てきた。どうしてそんな目で私を見るんだい、お嬢さん？

「馬鹿者が……」

さらに織斑千冬先生が此方を愚者でも見るかのような目で見てくる。

……どうして、そんな目ができるんだ……。

「え……だって、少なくともニコラスが読ませてくれた公に出来る漫画には……」

「大馬鹿者が、ここはＩＳ学園だぞ。クラス対抗戦といえばＩＳを使用した模擬戦闘に決まってるだろ」

ああ、あー。

クラス対抗戦って……ＩＳ使った対抗戦か……。

やっちまった。

そう思ったときには既に時遅し、周囲からクスクスという笑い声が聞こえてくる。

……終わった、私の運命は破滅……。

羞恥で顔が熱くなるのが分かる。

軽く泣きそうなんだけど。……自信満々にボルトがどうこう言ってたあの頃の私の首をへし折ってやりたい……！！

そうか……なるほど、それならセシリアさんが自薦するのも中々に理解できるわ。

私の出る幕ではないか……。

……いや待てよ？　ＩＳ？

ＩＳといえば私がポーカーの次に得意とする分野じゃないの。うん。

……よしよしよし、挽回できるぞシェミー。あの生意気なイギリス少女といい勝負して勝利して、最後に『いい試合だったわ』って言いながら手を差し伸べれば……行ける、行けるぞ私！　この方法ならクラスメートからの評判を持ちなおせる！

「だ、だがっ、そうだとしても！　私の方が上よ！」

「はぁ……、では、話にならないと思いはしますが、一応お聞きしますわね。ＩＳの稼動時間は？」

ええい、そんなのどうでもいいんだよ、なんか意味不明なところでぶち切れて勝負挑んで来なさいよ！　『決闘ですわ！』とか言いながら！！

……ちなみにＩＳ……特に専用機は、搭乗者に合わせて自己進化を繰り返し、より搭乗者に合った形になる。よって、共に過ごした稼働時間が物を言うわ。

それと兵器と思わず、パートナーと思え……とも、言われた気がする。私にとっては麻薬（ドラッグ）に近いけど。

もう、傷口（コレ）箱が無いと気が狂いそうになるもの。

とか考えてると、セシリアが此方をイヤな笑みを浮かべつつ見ている。

……恐らく『どうせ答えられないのでしょう？　欠陥品の分際で……調子に乗らないで欲しいですわね』とか考えてるのだろう。

今の精神状況でそんなことを言われたら泣く自信がある……確実に泣く……。
ただでさえ慣れない『学校』という雰囲気でテンパってるっていうのに……。
ええい、仕方ない。単純な計算でいいか。

「えーっと、大体４３８００時間ぐらい？　単純計算だからもうちょっと少ないかもしれないわ」
「は、はぁ？」
「……大丈夫よね、合ってるわよね？　コレ貰ったのが十歳の時でしょ？　それからほぼ毎日乗り回してるから……うん、合ってるわ」

素直に言ってみたところ、周りから多数の疑惑の視線と、少数の嘲笑を込めた視線を向けられる。
やめて……ほんとやめて……見ないで。
思わず黙り込んで座りそうになる気持ちを抑え、強がる。

「……む、信じてないわね……あんた等……よっしいいわ、私をクラス対抗戦に出してみなさい。全員同時に相手しても勝てる自信があるわ。……あ、織斑先生。私自薦するわ。うん」

右手を上げつつ織斑先生に言ってみれば背後のボードに書かれた『セシリア・オルコット』の横に『シェミー・アッシュダウン』と書かれる。
そして、セシリアが信じられないような目で織斑先生を見てる。
……絶対コイツ私をサイコパスか何かと勘違いしてるわね。人は信じろ、まったく。
そして更に、沈黙。
それは騒いでいたセシリアが私のせいで黙り込んでしまったから来たもの。

え、何この私が悪いみたいな雰囲気。それとこっち見るな、周囲の生徒。

……もうほんと……私を見ないでよ、ほんと……いや、目立たせたの私だけどさ……。

慣れてないのよ、大勢の人に見られるの……。

「……あー、どうぞ。まだ文句言い続けるんでしょ？」

その雰囲気に耐え切れず、思わずセシリアに振る。

声が若干涙ぐんでたけどバレてないことを祈る。

「……そう、そうですわ！　大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

熱しやすい人で助かった。そしてバレてなくてよかった。

どうにか先ほどまでの勢いを思い出すだけでフルパワーになれたらしいセシリアが大げさなポーズと共にそんなこと言ってると――。

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

――どうやらこっちの人は熱しやすく冷めにくい人だったようで。

「なっ……！？」

口が滑ったのかどうかは知らないけど、織斑一夏が発した言葉でセシリアは怒髪天をつくと言わんばかりに顔を真っ赤にして怒りを

しめてしている。

「あっ、あっ、あなたねえ！　わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

まあ、確かに何にもないのよね。料理も不味いし。

……といってもまあ、シェミハザ機関の食事は和食中心だったから、あまり食べたことないんだけど。

「あなたは黙っていてくださらない！？」

ひぃ！？　読心された！？

そして此方を見てくる複数の生徒達、飛び火した……最悪だ……ガソリンに引火したよ……。

「何も言ってない、何も言ってないから……」

顔を横に振りつつ両手を胸のまえに添えて全身で否定する。

こわい。学校ってとてもこわい……。

……というか、セシリアさんも随分とアレな人よね。自分だって織斑一夏の祖国を侮辱しといて。

あーあーやだやだ……これだから三次元の女は……。

……。

なんか、物凄くシェミハザ臭いことを思ってしまった。……気のせい気のせい、それに私だってシェミハザ機関。シェミハザ臭くたって問題なし。

「それよりも織斑一夏ッ！　決闘ですわ！」

バンッと机を叩くセシリア。……私の計画だと私が決闘申し込まれるはずだったのになぁ……。忘れないで、お願いだから。白くて

影薄いの自覚してるけどさ。

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――――いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？　何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

完全に出遅れた。

もう割り込めない……ハハハ……。

情けないけど……どうやら私の心は折れる運命にあるようね……。

三年間ずっとひとりぼっち、か……。

いいね……いい学園生活だよ……。

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

……と、そこで。織斑一夏さんがまた意味不明な発言をしたわけです。

ドッと爆笑が巻き起こる。

こいつ、本当にバカなんじゃないかと。そろそろ本気で思ってきたぞ、織斑一夏。頑張れ織斑一夏。負けてもいいけど足掻け。骨位は拾ってやる。

……まあ、私には関係のないことなんですけどね。

あぁーあ……今日から早速人気のない所を探さないといけないわね……、便所飯はイヤだしなぁ。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」
「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」
「織斑くんは、それは確かに使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

しかしみんな笑いすぎだぜ、意外と日本ってＳな人が多いの？
……え、私？　笑えるワケないじゃない……。
むしろ笑え、笑えよ。
あ、ちなみに補足すると今現在この世では男女で戦争が起これば三日で女が勝つらしいわよ。すごいね。

「……じゃあ、ハンデはいい」
「ええ、そうでしょうそうでしょう。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

先ほどまでの激昂は何処へ、セシリアは明らかな嘲笑をその顔に浮かべている。
やっぱり、熱しやすく冷めやすいわね、この人。
なんとも生きやすそうな性格ね、羨ましいよ。
……私？　私は普段は物凄く熱しやすいけど一度冷めると全然熱されないわよ。
ほら、今の私を見ればわかるでしょ？　笑っていいのよ？

「ねー、織斑くん。今からでも遅くないよ？　セシリアに言って、ハンデ付けてもらったら？」

織斑一夏から見てちょうど斜め後ろの女子が気さくに話しかけている。けれど、その表情は苦笑と失笑の混じったもので、それに織斑一夏が気を悪くしたことは表情からも簡単に読み取れる。

……いいじゃねえか、話し掛けてもらえるだけ。私を見てみろよ？　みんな目線合わせないぜ？
ハッハッハ。
シェミちん初日で大失敗☆てへっ！
……これだから学校には来たくなかったんだ……。

「男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデはなくていい」
「えー？　それは代表候補生を舐めすぎだよ。それとも、知らないの？」
「……」

結局割り込めずに話が終わった。私の学校生活も終わった。
ふふふ、やっぱり私にはイギリスの地の監獄がお似合いみたいね。
そこで私と同じコミュ障のヤツと一緒にエロゲだとか同人誌だとか二次元の世界に逃げ続けるのが一番なのだわ。

「さて、話はまとまったな。それでは織斑とオルコットの勝負は一週間後の月曜。そして勝ち残った者とアッシュダウンの勝負は二日後の水曜。それぞれどちらも放課後に第三アリーナで行う。各自でそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

……お？
なんか私が決闘に織り込まれてるぞ？　……おぉ！？

「なっ！？　織斑先生、今……何と仰いました！？」
「人の話はよく聞け、オルコット……。授業を始めると言ったんだ」

焦り気味にセシリア・オルコットが織斑先生へと問い詰めている。
それは焦るわよね。私だって今若干焦ってる。

「い、いえ……そこではなく……」
「じゃあなんだ？　……なんだ。アッシュダウンにシードを与えたのが不満か？　……安心しろ、コイツの実力は私が保障してやる」
織斑千冬先生が私を見つつそんなことを言う。
再びクラス中の生徒の視線が私の身体を射抜く。
「え……？　いや、ちょ……」
私は思わず半歩下がる。
がん、と背中に衝撃……後ろ？　振り向かないよ？　だってどうせ私をじぃっと無表情で見つめる生徒がいるだけなんだから。
そんなホラーは体験したくない。
「どうした？　……なぁに、安心しろ。この私が保障してやってるんだ、お前ならいい勝負ができるさ。だろう？」
更に織斑千冬先生が私へとプレッシャーを掛けてくる。
故意か意図せずか……それは分からない。いや、たぶん故意。
だろう？　じゃないです、先生……。死んでしまいます。心が死ぬよ。
「だがまあ……、どうしても嫌だと言うなら自薦を取り消してやってもいいんだぞ？」
「あっ、いや、あ……やります！　いやむしろやらせてください！」
私の名前を消そうとする織斑千冬先生に対し、気付けばそんなことを口走っていた。
……口走れてよかった。ここで何も言えずに自薦を消されたりすれば完全に挽回のチャンスを無くしていたわ……。

◇

「此方チームα、カメラの設置作業を行っている。支援を寄越してくれ」

放課後、私は第三アリーナで独り言を呟きつつアリーナ各地にカメラを設置していた。

理由は単純。来週月曜に行われる織斑一夏ｖｓセシリア・オルコットの戦闘を録画し、セシリアの動きを完璧に記憶するため。

織斑一夏については考えなくて大丈夫だろう。何せ専用機持ちじゃないし。……まあ、恐らく専用機はデータ回収のために送られて来るだろうけど、あの様子じゃ到底実力差はひっくり返せないわね。

……セシリア・オルコットがゴミのように弱いただの高飛車女だった場合は分からないけど……、期待しときましょう。お貴族様のワルツがなるべく綺麗なのを。

「……何をしている？」

「あ、ちーちゃん」

バシンッ！　と。

私の柔らかい頭はスパナで思いっきり打ん殴られたぐらいの衝撃を受けた。

……私が何をしたっていうんだ……。

誰に叩かれたか？

そりゃあ、もちろん。

織斑千冬大先生ですよ。

「目上の者には敬意を払え、馬鹿者」

「サーセン」

再びバシ―――食らうかぁッ！
私は即座に側転して回避する。
「ちょろいっっ！」
「そうか」
勝ち誇ろうとした瞬間。私の額を目掛けて出席名簿が飛んでくる。
「分離飛行だと！？　あんなものを浮か―――いぎぃっ！？」
亜音速に達しそうな勢いで出席簿が私の額へと突っ込んでくる。
……死んじゃう。
「まだやるか？」
「も、もういいです……」
「そうか」
許してもらえた、……助かった、正直言って本気で痛いわ。
今までシェミハザ機関の過保護の元でぬくぬくと育った私からすれば痛みというのはとても恐ろしいものなワケで……。
次があったらショック死してた、たぶん。
「で、何をしてるんだ？」
「セシリア・オルコットとか織斑一夏とかの動きを観察するためのカメラ取りつけですよ」
「ほう……？　あいつら程度、お前の敵ではなさそうだがな」
「……まあ、そうかもしれませんが……ほら、先生が随分と私に期待されてるようなので。応えないとなーと思って」

次に設置するカメラの設定をしつつ適当な言い訳をする。
……本当は怖いのよ、策も無しに挑むのが。私ってほら、結構弱気だから。
ソレに対して織斑先生は「ほう」と呟く。
……あ、しまった。
別の作業を行いつ質問に応えるのは……万死に値する！　……のかしら。
恐る恐る織斑先生の方向を向く。
すれば織斑先生はニヤついた表情でこちらを見てた。
……うん、大丈夫……だと思う。たぶん……。

「どうやらお前を勘違いしていたよ」
「え？」
「機関の奴らの話やら何やらを聞いた限りじゃ、自分の力量を勘違いしている小生意気なガキかとおもったが……なんだ、意外と可愛いじゃないか」

『可愛い』……ねえ。
もうシェミハザの奴らに散々言われたから聞き飽きた……と思っていたけど、何。結構言われると嬉しいわね。
それと結構恥かしい。

「か、可愛いって……」
「ああ、お前は可愛いぞ。そら、手伝ってやる」

そんなこと言いつつ織斑先生は私が設定し終えたカメラを持って仕掛ける予定を書き記した図を一瞥し、そのまま指定された場所へと向かって行く。
……なんか妙に優しくない？
自分からクラス中の声援をぶった切ったような人なのに……、正

直言って若干怖い。
何か裏があるんじゃないか。なんても思ってしまう。
「……シェミハザの奴らから何か聞いたんですか？」
思わず聞いていた。
織斑先生を信じたい。だけど、さすがに不審なほど優しすぎる。
うっすらと気味悪さすら覚える。
だから、聞いてみる。
信じるために、安心するために。
「別に何もないさ。お前の基礎的なデータだけだ」
「……と、いいますと？」
「露出趣味、ゴシックロリータ系統の服装を好む、男性経験なし、異性との交際経験もなし、交友関係もなし、最近の悩みは骨が浮き出してきたこと、左利き、性感帯はうなじから背骨に沿ったライン、スリーサイズは……」
「ふぁっ！？　い、いいです言わなくて！！」
スリーサイズ！？　どうやって調べたんだ、シェミハザ！
……あ、ネイサンか。
「そうか？　まだまだあるぞ、羞恥心はワリと人一倍ある、混乱すると動けなくなるタイプ、ホラーが苦手、パニック映画も苦手、ジェットコースター類も苦」
「やめてください！　本当に！　もうお願いします！」
「残念だ」
何を話してるんだ……シェミハザの奴ら……。

とか何とか思いつつ、それ以降もまったくやめずに私の恥かしい所を次々と上げていく織斑千冬に参りながらもカメラを一生懸命配置したのは言うまでもない……。

四式　クラス代表といえば（後書き）

お待たせして申し訳ありませんでした、次は早く投稿……できるはず！

五式　学食（前書き）

遅れました。そして内容がないよう。

五式　学食

「ここが私の部屋か……」

カメラ設置（そして織斑先生との千年戦争）を終えた私はＩＳ学園に付属する寮――ちなみにＩＳ学園は寮制だ――へと来ている。

何故かって？

寝るんです。眠いから。

夕飯とかいりません。

眠いんです。それに何か、今何食べても美味しくならなそうだし。

……また骨が浮き出るよ、やったねシェミちゃん。

あはは、うれしいな。

……たはは。

「はーい。今日からルームメイトのシェミーちゃんでーす。よろしくー」

などと言いつつ部屋に入ってみる。

部屋に入ってまず最初に目に付くのはベット。二つならぶベット。

……すげえ、あれが本物のベットか……私のパイプベットとは大違いだぜ……。

そして、それよりも注目すべき点は部屋の中が見事に無人だということ。

……えぇー？

何で誰もいないのー？　ひとりぼっちはさみしいんだよ……。

まあ、概ね違う部屋に行ってるんでしょうね。織斑一夏の部屋とか織斑一夏の部屋とか織斑一夏の部屋とか、まったくもう大人気だなぁ！　リア充死ねばいいのに！！

……まあ別にいいか、それよりも……今度は失敗しないぞ、絶対に成功させてみせる……ルームメイトと険悪な雰囲気でも作ったら死ぬしかない。

とか思いつつベットにダイブ。

着地と共に柔らかい、全てを包み込んでくれるかのような感触。

……ああ、これが本当のベットか……パイプベットの上にマットを敷いただけのモノに寝続けた私には優しすぎる……。

……。

……っ！？　今確実に寝てた、寝てたわよ！

駄目よ、シェミー！　今度は失敗しないって決めたじゃないの！

寝てどうする？！

……。

……あーでも、眠いし……なんか……別にいいか。

来た時に起こしてくれるでしょ……たぶん……。

『って、本気で殺す気か！　今のかわさなかったら死んでるぞ！』

……隣の部屋騒がしいし……どうせ織斑一夏……面倒なヤツだ。

……ねむい。

◇

……。

ゆっくりと目を開ける。

非常にゆぅっくりと。

悟られないように、悟られないように……。

何故か？　聞きたい？

今、部屋に誰かが入ってきたのよ、……まあ、恐らくはルームメ

イトなんだけど……。
入ってきた瞬間にね、ソイツね。こう言ったのよ。
『なんだ？　もう寝てるのか』
ってね。
それだけだったまだいいのよ。……でもね、物凄く何処かで聞いたことがあるような声なの。
何処かっていうか、ＩＳ学園でなんだけど。
ゆっくりと、ゆっくりと目を開けて、入ってきた人物を確認する。
「……ひぃっ！？」
「ん？　起こしたか、寝てろ」
そこには――――。
黒いスーツが非常に似合う長身の女性――――。
織斑先生が居た。
この部屋に唯一存在する椅子に堂々と座りつつコーヒーを飲んでらっしゃる。
……おかしくね？　え、おかしくね？？　なんで私教師と同じ部屋なの？
「な、なんで……」
「私は一年の寮長だぞ？　寮長室に居て何が悪い」
「は、はぁ……？　ここは１０２６号室じゃ……」
思わず枕元に置いたキーを確認する。
……うん、キーに括り付けられたタブには１０２６号室と書いてある。
それに部屋のドアに掛けてあったプレートにも１０２６号室と書

いてあったは――――。
……。
よくよく考えたら何で他の部屋はドアに直接書いてあったのに、この部屋だけプレートが掛けてあったんだ？
うん？
……。

「まさかぁっ……！！」

音速が如き速度で部屋から飛び出し、扉に立てかけて合ったプレートの『裏』を確認する。
一文字目。寮。
二文字目。長。
三文字目。室。
続けて読むと？
寮長室……！？

「バカな……」
「馬鹿も何もない。お前は私と同室だ」

いつの間にか背後に回った織斑先生が私の肩に手を置きながら呟く。
……こんなのってアリかよ……。

「まあ、なんだ。一年間頼むぞ」
「う、嘘だァァ――――」

バシィンッ、と。
叫ぼうとした直後に何処からか取り出した出席簿で頭を打ん殴られた。

死ぬ。

「痛いっ……痛い！　やめて！　ぼ、暴力反対！　い、痛いィッ！」

しかも織斑先生は陰湿なコトに端の一番固い所でコツコツと短く連続で叩いてくる。

痛さは先程の一撃に比べればそれほどでもないが、普通の人がやる二倍は痛い……と思う。

「ハッハッハッハッハ」

「ハッハッハッハッハじゃないわよ！　遊んでるでしょ！？　遊んでるわよね！？　確実に遊んでるわよね！！　酔ってるの！？」

バシィン、と。頭脳に衝撃。

……なんでまた殴るの……？　酷いよ……。

「年上の者には敬語を使わんか大馬鹿者」

「……はい」

り、理不尽だ……。

「それと私は素面だぞ」

「……はい」

これで素面とか死ねる。こいつはシラフでもジラフでもなくセラフだ。絶対そうだ。

「こんなにも優しい先生が一年間一緒に居てやるんだ、ありがたく思え」

「……」

「返事は？」
「……はい」
冗談じゃない……。
◇
……ということが昨日あった私から質問よ。
人を一番傷つけられる行為って何か知ってる？
無視、よ。
……。
私は今、実際にそれを痛いほど感じてるわ。
朝食？　誰も来ない端の席でコッソリと食べたわよ。
……もうやだこれ……どうしよう。
昨日のルームメイトが織斑先生というありがたいような終わってしまったような出来事から半日ほど。
四時限目が今丁度終わったんだけど。
もう死ぬ。心が死ぬよ。
だってもう、触れられもしないんだぜ？
いやんなっちゃうよ。……いや、自分が蒔いた種だけどね。
だって、あのセシリアですら来ないんだぜ？　もう終わってるよ、これ終わっちまったよ。
人っ子一人寄り付かない。
……。
仕方ない、学食に行こう……とりあえず何かは食べよう。これ以上食べなかったら栄養失調で死にそうだし。
そう思って席を立ったと同時。
――――織斑一夏が宙を舞った――――。
……なんで飛んでるのあれ？　ＰＩＣでも搭載したの？　それともあれか、二文字で一文字目がＥで最後の文字がＴのアレか。

自転車乗ってないしバックに月ないけど……。
しかもそんな意味不明な状況でも周囲に女子がいる。
……ええー？　なにこれぇー……。
と、思った直後。織斑一夏は背中から床に叩きつけられる。
あー、ジャパニーズＪＵＤＯか。じゅーどーね、あれ。
……全然柔らかくない！　殺意の鋭角がバンバン突き出てる！！
まるで殺意の正十八角形だ！
正十八角形に鋭角ないけどね。

「え、えーと……」
「私たちやっぱり……」
「え、遠慮しておくね……」

そしてさすがに周囲の女子達も引いた。いや、それは引くわ……。
いきなりロングポニーテールのジャパニーズサムライガールに投げ飛ばされる男にはさすがに引かないヤツなんていないわよ……。
っていうか、あのロングポニテのジャパニゾサムガルは何なのかしら。知り合い？　幼馴染？　歌？　ほら、こんなもん。
それよりもあのロンポ邪魔じゃないのかしら……、本当にジャサムガなら剣道とかやってるんでしょう？　絶対切り落としたほうがいいわよね。
……刀＝ロングヘアー？　あのね、知ってる？　髪にも重さはあるのよ？　伸ばしてたら動きにくいわよ。
髪が邪魔になる一番の理由は『重さ』なのよ。
……まあ、持論だけどね。
なんとかかんとか考えつつ織斑一夏の横を素通りすることにした。
女子達に囲まれてない今、あいつの隣を通ればすんなりと進めるはず。
……まったく、教室の出入り口に女子固めるんじゃないっての……。

「な、名前で呼ぶなと――――」
「飯食いに行くぞ」
「箒（ほうき）」

私が織斑一夏の横を通り過ぎる三十秒前、サーガ……箒（おそらく織斑一夏の旧友か幼馴染）？　の腕が織斑一夏にがっしりと掴まれた。
おおう……強引……。
というか箒って……、掃除用具？

「お、おいっ。いい加減に――――」
「黙ってついてこい」
「む……」

私が織斑一夏の横を通り過ぎる五秒前、織斑一夏はにべもなくそう言い、学食へと向かおうとする。
むっ……やめろ、せめて私が通り過ぎるまで起動するんじゃない、ワンサマ。……王（ワン）様？
などと考えつつ前進。通り過ぎるまで三秒……二秒……一秒……。通過。
これで地球は救われた……。
そう思いつつ通り過ぎた瞬間。私の右手が誰かにぐっと握られた。
思わず振り返ってみれば、織斑一夏が私の顔をじぃっと見ていた。
え、何なのこの人……？
怖いんだけど。投げられる？　柔道で投げられるのか？
脱臼しちゃう。絶対脱臼する。……痛いのはイヤだなぁ……でも抵抗して怒らせると怖いしなぁ……。
というか、腕を掴まれてみてわかったけど……、なんていうか、男と女じゃ手の掴み方すら違うのね。

更に言えば怖い。怖いぞ、織斑一夏。無表情でこっち見ながら手を掴まないで。
怖い。ものすごく怖い。
なんていうか、眼力がある。……あの姉あってこの弟か。

「……なんでお前泣いてるんだ……？」

ふと硬かった表情を崩した織斑一夏はそんなことを私に向かって言ってきた。
泣く……？　ハッ……何を馬鹿な……。
私の涙はとっくに枯れ果てたさ……地獄に落ちたときにな……。
じゃないっ！　え！？　泣いてる！？　私が！？
ものすごく久しぶりな気がする。朝起きて目を開けた瞬間にボルゾイのフェイスという名の最終兵器が初めて写りこんだとき以来かしら……？
……正直言って、あれは精神ブラクラレベル。気がおかしくなる。直視しちゃいけないものだ。

「な、ななっ！？　な、泣いてないわよ！　適当言ってると背骨引っこ抜いて骨髄バンクに寄付するわよ！？」
「なんだよ……その脅し方……善人なのか悪人なのかわからねぇぞ」

私が一瞬で思いついた脅し文句を聞いて微笑を浮かべる織斑一夏。
馬鹿な……私のとっさの一撃を笑って受け流した……？
化け物め……。

「で、何で泣いてたんだ？」
「だっ……だから泣いてないわよ！　別に初日からミスしてクラスから浮いて孤独に精神を削られて、その後悔の念と居心地の悪さから朝食もあまり喉を通らずに泣きそうになったけど、無理してそれ

を我慢してたのに急に人生初の生きてる感じのする男に急に腕を掴まれて驚いたのと恐怖のあまりについ泣いてしまったとかそんなんじゃ全然ないからっ！？　変な勘違いしないでよ！？　もしもするようならあんたを拘束して遺伝子学者に無料でプレゼントして男性がＩＳに乗るという男の夢に貢献するわよ！？」

「あ、あー……うん。俺の勘違いだったよ、お前は泣いてない。泣いてない。これっぽっちも泣いてない」

「そ、そうよっ……！　泣いてないっ！　泣くわけないじゃないの……この程度でっ……」

思わず声が後半震えたのは泣いているせいではない。断じてない。

「……お前も一緒に飯食おうぜ？　一人よりはマシになると思うけど……いや、お前がイヤだってんならいいんだが……どうだ？　来るか？」

曖昧な笑みを浮かべつつそんなことを言う織斑一夏。

……。

「……行く」

◇

「そういやさあ」

学食にて、未だに日替わり定食を貪り続ける織斑一夏は急に話題を振ってきた。

……え、私？　私はチキンナゲット二個とサラダ（小）とシェミハザが作ったサプリメント……のようなものを食し終わったわ。

正直言って食べ過ぎた。ほかの人と昼飯食べるってことでテンシ

ョン上がって調子に乗ってしまったわね……。
今にも吐き戻しそう。……とりあえず昼休みは横になるしかないわね……動いたら吐く。即リバースする。
ちなみにシェミハザが作ったサプリメント的なモノは何か、食後に必ず三錠飲むように言われてるのよね、一回何なのかネイサンに聞いてみたけど『お前の健康バランスを保つものだ』としか答えてくれなかったし、それっぽいからそれで納得してるけど……。
なんなのかしら、これ。市販のじゃなくてシェミハザ製ってのが引っかかるのよねぇ……。
それに飲むと若干頭がぼーっとするし、眠くなるし。
……これサプリメントじゃなくね？
怪しい……怪しすぎる……。
と、思っても結局は飲むしかない、なんたって以前に何か怖くなって飲まなかったら酷い頭痛に襲われたんだもの。
あの時は頭が割れて中から寄生虫でも飛び出すのかと思ったわ。
それだけ痛かった。

「……なんだ」

私がまったく別なこと考えてる間に箒――――篠ノ之（しののの）箒というらしい、さっき自己紹介させられた――――が味噌汁に口を付けながら返事。
マナーがなってないな、生まれの悪さが滲み出してるぜ。
……というか、篠ノ之って……しののの？　しのののの……、デュララララ……シノノノノ！！　……？
ゲシュタルト崩壊しそうな苗字だわ。……あるいはライトノベルみたいな……。
「ＩＳのこと教えてくれないか？　このままじゃ来週の勝負で何も出来ずに負けそうだ」

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

何か言いたいけど言えない。
恥ずかしくも私は何も言える立場じゃない。
大変お恥ずかしい……。

「それをなんとか、頼むっ」

箸を持ったまま、ぱしりと手を合わせて箸を拝む織斑一夏。
……お前な、男としてのプライドは何処へと行ったんだ。
あんなに男のプライドプライド言ってたのに……。
もう少し努力ってものをしましょうよ。諦めるの早すぎ。

「……」

そして無視する箸。……おぉ……なかなかにサディ……。

「じゃあさ、織斑一夏。私が教えてあげましょうか？」

ふと提案してみる。

「……お？　あ、いや……別に俺は構わないけどさ、お前はいいのかよ？」
「構わないわよ。……で、でもっ、勘違いするんじゃないわよ！？
別段あんたを鍛えてセシリアに勝たせればセシリアを大笑いすることができるし、更に私があんたに勝っちゃえばセシリアを奴隷にできるとか一切考えてなくて、ただたんにちょっとあんたと過ごす時間を増やしてみてあんたについて、もうちょっと知りたいとか思ってるだけなん……う？」

……あれ、逆じゃね？

「い、いや……今のはちょっと……こう、語弊があったっていうか……ちょっとあんたに興味あるっていうか……」

……うん。

あれだ。

いや、何ていうか……、私ってもう誤魔化すのが壊滅的に下手なのかしら。それとも口がよく滑るのか……。

クソッ、この口滑りすぎる！　誰よローション塗ったの！！　ふざけんな死ね！！　おなか壊したらどうするの！？

……しかしまあ、潤滑油を塗らなかったのは評価してあげるわ。

「うん？」

織斑一夏が極めて不思議そうな顔してこっちを見ている。

くっ……また失敗するのか、私は……。

失敗するのはイヤだ……またあの地獄に落ちるのはイヤだ……。

……私って結構メンタル弱い……？　もしかして。

「だ、だから……このＩＳ起動時間五年を誇る私が手取り足取りＩＳについて教えてあげるから……できればそのまま互いの絆を深められると嬉しいな、って言ってるのよ」

「……ん？　最後の方はよく聞こえなかったが……、とりあえずＩＳについて教えてくれるんだな？」

「そうって言ってるじゃない……」

どうやら最後の方は聞こえなかったようだ。助かった。……いや、助かってない。箒がものすごいにらんでる。怖い。

死ぬ。眼力で射殺される。

「ちょ、ちょっと……な――――」
「ねえ。君って噂のコでしょ？」

私が篠ノ之箒へと睨む理由を聞いてみようとしたところ。
それを妨げるのを狙ったかのように織斑一夏が三年生に話しかけられる。
ちなみにこの学園では学年ごとにリボンの色が違う。一年は青、二年は黄色、三年は赤。これを見て織斑一夏に話しかけた女子の学年を判断したのは言うまでもない。
癖毛なのか、やや外側に跳ねた髪が特徴的で、どこかイヌを思わせる人なつっこい顔立ちをしている。
……恐らく織斑一夏はリスとか考えてるだろうが……リスはそこまで人なつっこくないぞ。人間の持つエサにがっついてるだけだぞ。ネズミとなんら変わりないぞ。ハハッ☆
しかし先ほど私を睨んでいた強面サムライガールとは対極に位置するわね……。
でも騙されるな織斑一夏、いつの時代だって一番身を案じてくれる人は一番自分に厳しくしてくれる人なのだから……。
こういう女は危ないぞ、織斑一夏！

「はあ、たぶん」

織斑一夏が適当かつ曖昧な返事を返すと、三年生は無駄に無駄のない無駄に自然な無駄な動きで無駄に隣にある無駄な席へと無駄にかける。
……本当に無駄だなあ……、今は私と織斑一夏（それと一人）が楽しくお食事してる時間だってのに……。
どうせ友人の一人や二人いるんだろうからそっち行けばいいのに。

「代表候補生のコと勝負するって聞いたけど、ほんと？」
「はい、そうですけど」
噂って広まるの早い。思わず戦慄する。せずにはいられない。
……『一組には頭のイっちまってるアルビノがいる』とか広まってないよね？　……ねぇ？
「でも君、素人なんだよね？　ＩＳ稼働時間いくつくらい？」
私の予想だと……一時間くらいね、たぶん。
いやいや……いくらなんでもそれくらいは動かすでしょう……。
「いくつって……二〇分くらいだと思いますけど」
短ッ……。
アニメ一本にすら及ばない……だと……！？
「それじゃあ無理よ。ＩＳって稼働時間がものをいうの。その対戦相手、代表候補生なんでしょ？　だったら軽く三〇〇時間はやってるわよ」
短ッ……！？
なにそれ……え？　これ私がおかしいの？　狂っているの世界？
それとも私？　プラスレス。
百の位で四捨五入したら私が４４０００時間でセシリア・オルコット、織斑一夏は０時間じゃない。
おお……、よかったな織斑一夏。セシリア・オルコットとお前は同レベルだぞ。勝てるかもしれんぞ。
「でさ、私が教えてあげよっか？　ＩＳについて」

言いながら三年生はずずいっと織斑一夏に身を寄せていく。
わーお大胆。
だけどな、先輩よ。放課後の織斑一夏との時間は私がすでに予約済みなのだぜ？

「はい、ぜ」
「結構です。私が教えることになっていますので」

食事を続けながら、いきなり篠ノ之箒がそんなことを言い出した。
……アレ？　そんな約束してたっけ？　いや、してない。
……何適当抜かしてるんだこのアマ……、放課後の織斑一夏との時間は私のものだ、私だけのものだ……！
いや、別にこう……一目惚れとかじゃなくて？　興味があるっていうか、何か教えてあげたいってか。
……まあ、うん……私も他人と関わりたいのよ。

「あなたも一年でしょ？　私の方がうまく教えられると思うなぁ」
「……私は、篠ノ之束（たばね）の妹ですから」

死ぬほど言いたくなさそうに、それでもこれだけは譲れないとばかりに箒が言う。
……そう、そうなのよ。
この篠ノ之箒はＩＳの開発者にして世界最高の頭脳の持ち主……とシェミハザ機関が勝手に呼んで同人誌（大きいお友達向け）化してた人物の妹なのよ。
……しかし、まさか篠ノ之束も予想はしてないでしょうね。自分たちがイギリスの端っこの方に固まってるイカくさい変態共の欲望のはけ口にされてるだなんて……。
ちなみに私も見せてもらったけど、正直言ってもう……篠ノ之束

に同情するしかなかったわね。もしも……もしも会うことがあったら見せてあげよう。そして感想を聞いてシェミハザの奴らに教えてやろう。
むしろ写真撮ってメールで送ってあげよう。

「篠ノ之って――――ええ！？」

三年生はここぞとばかりに驚く。そりゃあなあ、ＩＳを作った人の妹なのに全然知的な雰囲気ないもんなぁ。

「ですので、結構です」
「そ、そう。それなら仕方ないわね……」

さすが世界的に有数であろう平仮名で書くとゲシュタルト崩壊を起こしかねない苗字を持つだけのことはある……、その名前を出しただけで大抵の人間はたじろぐ。事実、親切っぽい腹黒（断定）三年生は軽く引いた感じで行ってしまった。しののの、しののの、しののの、しののの、しののの、しののの、しののの、しののの。
うーん、目が痛いぞマックス。

「なんだ？」
「なんだって……いや、教えてくれるのか？」
「そう言っている」

うんうん、美しきかな……幼馴染の友情……。
じゃないわよ。私を無視するなよ。

「ちょっと待ちなさいな、あんた……、いや、しののほうき……いや、しーちゃんよ。織斑一夏には私が教えるからあんたはゆっくりしてていいのよ？」

「……お前、話を聞いていたか？　私は篠ノ之束の妹で――――」
「いつの時代だって兵士に武器の使い方を教えるのは開発者じゃなくて兵士なんだぜ？」
「ぐぅっ……」

イタいところ突かれた、みたいな表情を浮かべる篠ノ之箒。
ハッハッハ。私はあの三年生ほど温くはないぞ？
……と、余裕ぶってみたものの、実質にはとても泣きそう。
……だってね？　箒サンがね？　むちゃくちゃ怖い顔で睨んでるんだもん……。
ゴルゴ十三番か、お前は。

「……わかったわよ、一緒にやりましょ。一緒に……」

思わず眼力に負ける。
……だって、本当に怖いんだもん……。
……その後？　聞き流した限りじゃ放課後に剣道場で何かやるらしいわよ。わあ、楽しみ。

六式　俺だけは（前書き）

何とか八千字に収まっ……た……ガクッ。
と思ってたけど、問題点を編集したら余裕で超えたよ畜生！！

六式　俺だけは

「……アレ？」

気が付くと私は第三アリーナから締め出されていた。

……アレ？

あ、ありのままに起こったことを話すぜ……！

私は織斑一夏（ついでに篠ノ之箒）と『第三アリーナで実際にＩＳを動かしながら基礎訓練』をする約束を取り付けたと思って待ち続けていたらアリーナが閉じられた。

な、何を言ってるか以下略。

……うん。

約束を……破られた……？

顔を伏せて通りがかる人々の視線を気にしながら気まずく端っこの方で私は待っていたというのに……？

……ああ、やっぱりあれか、イヤか。私なんかに教わるのが。

そうかそうか……。

普通はそうだよなぁ……。

「あははは……」

思わず自分の愚かさに笑いが出る。

何を期待してんのよ、私は。

常人にすら劣る私程度に見向く人などいるわけも無かろうに……。

はぁ、と溜息を吐きつつ部屋へと戻ることにする。

第三アリーナを出て、そのまま中庭へと出て、中央に存在するベンチへと思わず腰掛ける。

真正面には丸い月。……今日は満月か。

満月なんて見るのはずいぶんと久しぶりだ。

何せ最近までずぅっとシェミハザ機関の牢獄みたいなあの部屋の中だったし。
私は月が好きだ。
太陽と違って直視しても目は痛まないし、肌も焼かれない。
……それに、何処にいても直ぐに分かる太陽と違って探さないと見つからない。
そういう謙虚なところが好きだわ。

「……あれ？　シェ……あ……」

ふと。
声がした。
顔を見れば、織斑一夏だった。

「……」
「わ、悪い……」

どうやら向こうも今更思い出したようで気まずそうな表情と共に苦笑いを浮かべ、手を合わせて許しを請うてくる。
……ほう。

「織斑一夏サン」
「な、何だ？」
「私ね、満月の晩は血が騒ぐの」

即座に私の分身であり、私の最大の武器であるＩＳ『傷口箱（スカーレッド・ボックス）』を展開し、傷口箱（スカーレッド・ボックス）の主力兵装である超振動槍（ヴィブロトライデント）『トリシューラ』を右手に呼び出（コールする）す。

「この槍はね『薄きを貫き、厚きを削りきる』っていうコンセプト

の元に作られたの、人間程度が生身で触れれば一瞬で微塵切りなの♪」
「ま、待ってく」
「その命、散らすが良い。暗月の剣の名の下に」
両手を顔の前で振って、曖昧な笑みを浮かべる織斑一夏を狙ってトリシューラを突き出す。
「うおぁっ！？」
織斑一夏は私の突きを大きく動くことで回避するが、自然とバランスが崩れて隙ができる。
私はそれを見逃さずに地面に突きたてたトリシューラをそのまま地面を走らせ、織斑一夏目掛けて振り上げ――。
ようとしたところで、ＩＳを仕舞い込む。
さすがに殺すのは忍びない。
「……本当に今日は悪かったな」
「……」
私は織斑一夏の声に反応せずにベンチへと深く座り込む。
「……」
「……」
互いに沈黙。だけど沈黙の寸前に織斑一夏は私の隣に腰掛けてきた。
「今日さ、久しぶりに箒と一戦交えたんだけどな、惨敗だったよ」

聞いてもいないのに織斑一夏は話し始める。
勝手なヤツだ。
「……まあ、中学通ってた三年間、ずっと剣道に手ェ付けてなかったからな、仕方ないんだけどな……」
自嘲気味に織斑一夏が言う。
聞いてないっての。
「あ、でも別に遊びに明け暮れていたとかじゃないんだぜ？　俺なりに家計を助けようと思ってバイトをだな……」
聞いてもいないのに、自分で言ったことへの訂正を加えてきた。
どうでもいいっての。
「……でも、皮肉だよな。誰かを助けようと思ってやったことが仇になって……後で誰かを傷つけちまうなんてさ」
ふと、織斑一夏が暗い声色でそんなことを言う。
「……まず最初に自分のことを最優先に考えて、お前との約束を忘れた。……それに、箒も多分俺がここまで落ちぶれたことに多少なりともショックを受けてる……やっぱ、ダメだな。俺って。何やっても裏目に出んの」
続いて暗い音色で述べ続ける織斑一夏。
私は少しだけ気になって、顔色を伺う。
「……本当に、悪い」

織斑一夏がこちらを見ながら心底すまなそうに謝ってくる。
……。
「別にいいわよ……気にはしてるけど」
思わず許す。
そんなに暗い顔してるのに許さないなんてできない。できるヤツは人間じゃない。
悪魔か何かよ。
「シェミーは優しいんだな」
「……別に」
織斑一夏は弱弱しい笑顔を浮かべながらそんなことを言う。
……私は優しくはない、適当なだけで。
「……シェミーってさぁ、何でそこまで自信なさげなんだ？　もっと胸張ってもいいと思うぜ、優しいし、見た目も可愛いし」
「可愛い……ね、知ってるわよ。そんなの……」
私の言葉に織斑一夏は若干冷めた目で見てきた。
ナルシストだと思ってるわね、コイツ。
おいこら、さっきまでの暗い顔は何処に消えた？
「……別にナルシストとか、そんなんじゃないのよ？　……じゃあいいわ、私の身の上話をしてあげる」
私がそう言うと、織斑一夏は不思議そうな表情を浮かべる。
「私の生まれはイギリスの未開の地。未だ電気すら通っていない異

端の異端――。そんな場所で一般的な世界でも異端中の異端である私（アルビノ）が生まれれば、どうなると思う？」
「どうなる、って……」
織斑一夏は答えを出せないようで、悩ましそうな顔をしている。
そんな悩むことでもないだろうに。
「白金のように白い髪、焼ける炎のように赤い眼。白人よりも更に更に白い肌。私はこう呼ばれたの『女神』ってね」
「女神……」
「毎日毎日私を信仰する人々が食料やら衣類やらを献上しに来て、私の姿を一目見ようと足も不自由な老人が死に物狂いで来て……、重病を患った母を養う青年が私の血を秘薬だと信じきって来たりもしたわ。……でも、本当に不思議なのよね、私を一目見た瞬間に足が不自由な老人は歩けるようになり、重病を患っていた青年の母は私の血を一滴混ぜた水を飲ませれば完治したらしいし……。嘘だと思ってる？　まあ、仕方がないわ。私自身嘘だろうと思ってることだもの」
「……でも、じゃあ、なんで今シェミーは日本に来てＩＳに乗ってるんだ……？」
織斑一夏が心底不思議そうに聞いてくる。
……そりゃそうだ。
「私、家族ごと村から迫害されたのよ。『吸血鬼』って呼ばれてね」
「……は？」
「些細な出来事だったわ。何処からかは知らないけど、吸血鬼の話が私の村に入ってきたの、……そのころ私は自分のことなんて一切知らなかったけど、太陽光を浴びるのは本能的に嫌っていたの。……だから夜ばっかり外に出ていた。……その姿が村人たちには『太

陽光を浴びたら死ぬ』っていう吸血鬼と被ったらしくてね……、随分と酷い目にあわされた。……で、その後私は自分のせいで両親が苦しんでることに気づいて、家出」

「……」

「……で、そのあと私は無事シェミハザ機関に保護されて、五年間引きこもって生活してきたんだけど。……何か異論は？　あ、ちなみにシェミハザ機関ってのは私のＩＳを作った機関のことよ」

話し終わって、織斑一夏の表情を伺う。

俯いていて、よく分からなかった。

「で、あんたには私はどう見えてるの？　女神の偶像？　血を吸う怪物――――て、……え？」

私は嘲笑的に言おうとしたけど、強く体を抱きしめられて、思わず言うのを止める。

「俺にはお前は女神にも吸血鬼にも見えねえよ……！　俺に見えてるのは、孤独に苦しんでる一人の女の子だけだ」

耳元で力強く、織斑一夏が呟く。

「安心しろ、全世界がお前のことを女神だとか、吸血鬼だとか言ったって……俺だけはお前のことをシェミーって呼び続けてやる……」

そこまで言って、織斑一夏は私から離れながらも両肩に手を置き、まっすぐこちらを見つめてくる。

「お前が世界中から非難されたって、俺は絶対にお前のことを守ってみせる」

思わず言葉を失う。
……出会ってから大して経ってないし、馬鹿げた昔話をしただけでここまで言うヤツは初めてみた……。
いや、それ以前に私は出会いが少なすぎるんだけど。

「……あ、すまん」

今更自分のやってる事に気が付いたのか、織斑一夏は私の肩から手を離して赤面しつつ、気まずそうに顔を俯ける。
赤面してるのはこっちだってのに。

「じゃ、じゃあ！　そろそろ俺は戻る！　明日から箒先生が鍛えてくれるそうだからな！」
「……あら、私との時間は一瞬たりともないのね」

勢いよく立ち上がり、私に背を向けて自室まで走って帰ろうとする一夏へと声を掛ける。

「うっ……悪い……」

硬直しつつ、心底申し訳なさそうな声を上げる一夏。
たまには人の願いを断るってことを覚えなさいよ、コイツ。
などと心の中でグチりつつ、恐らく気まずそうな顔をしているであろう一夏の背後へと私は近寄る。
一夏は私の気配を感じつつも、表情が見えないからか未だに硬直している。
そんなに背中ばっかり見せてるとバックスタブで即死させられるぞ。
とか何とか思いつつ、ゆっくりと一夏の首へと手を回し、肉薄し

――――。

――――未だに硬直する頬へと軽く唇を当てる。

その後。すばやく離れると、一夏は左の頬を押さえながら顔を真っ赤にして何が起こったか理解できない、といった表情でこちらを見てくる。

やぁい、ざまぁみろ。顔真っ赤にしてやんの。

「ぜぇったいに許さない。だからあんたに今呪いをかけてやったわ。……私の厚意を跳ね除けたんだから、セシリアに勝ったら承知しないわよ」

「ふ、普通逆じゃないか！？　というか今何を……」

「逆じゃないわよ、あんたが私の教えなしでセシリアに勝ったら心配した私がバカみたいじゃない」

「そういうものか……？　というより、承知しないって……何を……？」

「もっと、酷いことするってコトよ。……それよりももう行ったら？　明日から篠ノ乃箒が鍛えてくれるんでしょう？」

「あ、ああ……そ、そうだな……」

何かぎこちのない動きで一夏は走り去っていく。

……。

その背中が見えなくなった後、私はゆっくりとベンチに座り込む。

そして直後。

私の脳が炉心溶融（メルトダウン）……いや、炉心貫通（メルトスルー）した。

やばいやばいやばい……何やってんのよ私！？

お、おおぉ……おおおおぉおおおぉおぉぉ……！！　私が太陽だ！！

思わず顔を両手で押さえて両足をバタバタと暴れさせる。

やっちゃった！　やっちゃったよ！！

恥ずかしぃぃぃ！！　恥ずかしぃィィィィ！！

「やっちゃったぁぁぁぁぁ！」
「ほう、こんな夜中にこんな場所で何を『やっちゃった』んだ？　詳しく聞かせてもらおうか」
「や、やぁね！？　すご、凄いのよ！　わ、わたっ……私！　一夏のね！？　ほ、ほっぺたにね！　こ、こう。きききききっキスと世間的に呼ばれるものをね！　ほんの一瞬だけど、一瞬だけどしちまいやがったですでありますぜよなのだぜのことよ！？　うふっ、うふふふっあはははは……はは……お？」

ゆっくりと背後を振り向く。
直後、私の頭を狙って振り下ろされる出席簿―――。
バシィンッ。
……ああ。

「お、織斑千冬先生……」
「もう就寝時間はとっくに過ぎているハズなのだがなぁ……、というよりも私の職務時間すら終わったのになぁ……、なぜお前はここにいるのだろうなぁ……？」
「あ、アハハ……なんででしょうね……？」
「それに私の聞き間違いかもしれんが……、私の弟に色目を使ったようじゃないか」
「まさかそんなっ！　決して一夏がいきなり抱きついて来て『お前を守ってやる』なんていわれて思わずキュンときて衝動的に頬にキスしちゃったとかそんなんじゃ……ハッ！？」
「お前が馬鹿で助かったよ。……それにしても、あいつもなかなかどうして……ふむ」

何か一人で満足げに頷く織斑先生。
……ああ、ごめんなさいね、一夏。

明日、お前死ぬかも。

◇

そして翌週、月曜。一夏とセシリア・オルコットの対決の日。

「――なあ、箒」

「なんだ、一夏」

一夏が相変わらず不満そうな表情をしている篠ノ之箒へと話しかける。

ちなみにこの一週間で私のクラス内での評判は大分取り戻した。まあ、ほとんど一夏のおかげだけどさ。

正直……助かった。今まではクラスに入るのが苦痛だったけれども、今ではクラスに入るのが楽しみにすらなっている。

ほんま一夏さんは救世主やでぇ……惚れちまいそうやわぁ……。

え？　既に惚れてるんじゃないかって？　黙れ、お前の脳髄を調べ上げて人類種の進化に貢献してやろうか。

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか。気のせいだろう」

その返し方はおかしいだろう。『ねえ、ねえ、知ってる？』並におかしいだろう。

……知ってる？　って聞かれても何を知ってるのか聞かれてるのか分からないもの知ってるわけがないじゃない、っての……。

「ＩＳのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「……」

「目　を　そ　ら　す　な」

どうやらアレから六日、篠ノ之箒は剣道の稽古をみっちりと一夏に付けてあげたようだ。……まあ、大方それしかしてくれなかったのでしょうが。

「し、仕方がないだろう。お前のＩＳもなかったのだから」

「まあ、そうだけど――――じゃない！　知識とか基本的なこととか、あっただろ！」

「……」

「目　を　そ　ら　す　な　っ」

つまりあれだわ、一夏専用のＩＳとやらは何かごたついていたらしく、結局来てない。

……セシリア戦が始まる寸前の今ですら来てない。

仕事おっそい……。

「ふむん。やっぱり私に教わった方がよかったんじゃない？」

「仰る通りで……」

「なっ！？」

私が若干笑みを浮かべつつそんなことを言えば、一夏はぐだっとうなだれ、篠ノ之箒は焦りと驚愕を混ぜたような表情を浮かべて私を睨んでくる。

もう慣れた、怖くない。

「だ、第一っ！　お前が教えても一夏のＩＳがないのなら授業とならんら変わりないだろう！　それなら私が稽古を付けてやったほうが有意義のはずだ！」

「ＩＳがないなら一夏は私に乗っかればよかったんじゃない？　体力も付けられるし、……ほら、貴重な稼動データが……」

「お、お前は何を言ってるんだ！？　それはＩＳとはまったく関係ないだろう！？」

ＩＳ着込んだ状態でニャンニャンしたらどうなるのかしら……やっぱり、貴重な稼動データが取れるの……？

興味深いわね……。

「……そんなことやったら俺が落ちるだけじゃないか？」

一夏が意味の分からないことを言い出す。

……いや、理解してないだけか。意外と純真。そして篠ノ之箒はわりと汚れてる。

「お、、織斑くん織斑くんっ！」

名前を三回もコールされたぞ、一夏よ。

どこかの教材のＣＭ（天神とかいうヤツだったか）かのごとく三回コールをしつつ第三アリーナへと駆け込んできたのはおなじみ副担任の山田先生だ。

どうにもＧＡ製ブースターでも使ってるのか、早々にエネルギー切れを起こして息切れし始めている。

しかも本気で転びそうで、見ているこっちがハラハラする足取りなのも相変わらず。しかし、今日はいつもよりさらに輪にかけてあわてふためいている。

……胴体はＧＡ製なのに足はアスピナ製なんだよなぁ……。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す～～～は～～～、す～～～は～～～」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

軽いノリで一夏が言うと、山田先生は本気で息を止めた。こうしている間にも酸欠でみるみる顔が赤くなっている。
……しかしまあ、どうやったらそんなに胸が大きくなるのかしらん……肉食なの？　あ、ちなみに私は草食よ、好物はレタスの微塵切り。味付け何もなし。のさっぱりとしたヤツ。
この間一夏からちょっとだけ肉類分けてもらったけど、無理。あれは食えない。無理無理。
ちなみに私の一日の食事は朝が大体が先程言ったレタスの微塵切りを小皿に少々乗せたもの、昼にレタスとキュウリを小皿に少々乗せたもの、夜は豪勢にキャベツの塩炒めを小皿いっぱいに乗せたもの。
この食事を見た一夏は顔を真っ青にして『お前、それでよく生きられるな……』とか言ってきた、失礼な。
……でも、なんでこんだけしか食べてないのに私は体力が有り余ってるんだろう……。

「……」
「……ぷはあっ！　ま、まだですかあ？」

私の食事の話をしている間に山田先生が息を吸う。
……よかった、この先生だと失神するまで息を止めてそうだったから……。

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

パァンッ！　いつもと同じ、弾けるような打撃音。ちなみに痛みはヘビー級プロボクサーの右ストレート以上よ。
……それは死ねるか。

「千冬姉……」

パァンッ！

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」

おぉう、辛辣なお言葉。しんらつ、じゃなくて辛辣。

多分一夏は『教育者とは思えないお言葉。美人の割に彼氏がいないのはこの性格のせいだと思う』とか思ってる。というか顔に出てる。わかりやすっ。

「ふん。馬鹿な弟にかける手間暇がなくなれば、見合いでも結婚でもすぐできるさ」

ほぉら、バレた。

……しかし、織斑先生よ。そう思って数多の仕事人間の女性が独身のまま生涯を終えたのです……。

「そ、そ、それでですねっ！　来ました！　織斑くんの専用ＩＳ！」

山田先生の言葉。

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ」

織斑先生の言葉。

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。一夏」

篠ノ之箒の言葉。

「Ｇｏｏｄ　Ｌｕｃｋ！！」
「おう！」

グッ、と右手の親指を経ててサムズアップをしてやる。
すると一夏は意気込んだ様子で答える。
……恐らく彼は知らないのだろう。Ｇｏｏｄ　Ｌｕｃｋには『（どうせ無理だろうが）せいぜい頑張ってみればぁ？』という皮肉めいた意味があることを。そしてサムズアップは中東とか西アフリカとか南アメリカでは侮蔑の意味があることを……そして更には古代ローマの剣闘士競技の観客の中では敗者へと向けられるサインだったということを……（ちなみに意味は『敗者を許せ』、指が下を向くと『敗者を殺せ』になるわ）。
私はどっちの意味でやったか？　ご想像にお任せするわ。
そして、一夏は私へとサムズアップを返そうとして――――。

「「「早く！」」」

山田先生、織斑先生、篠ノ乃箒の声が重なった。
一夏は若干不満そうな表情を浮かべつつも私からピットへと向き直る。
うみゅー、残念なのら。
ごごんっ、と鈍い音がして、ピット搬入口が開く。斜めに噛み合うタイプの防壁扉は、重い駆動音を響かせながらゆっくりとその向こう側を晒していく。
――――そこに、『白』が、いた。
白、真っ白。飾り気のない、無の色。眩しいほどに純白を纏ったＩＳが、その装甲を開放して操縦者を待っていた。

「これが……」
「はい！　織斑君の専用ＩＳ『白式（びゃくしき）』です！」
真っ白のそれ。無機質なそれは、けれど一夏を待っているように見えた。
……私の時とは大違いね、私の時『傷口箱（スカーレッド・ボックス）』は何度も拒否反応を起こして大変だったわ。
……ＩＳって拒否反応とかするの……？
「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実践でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」
せかされて、一夏は純白のＩＳに触れる。
「あれ……？」
一夏が突如として小首をかしげる。
……うん？　何かあったのかしら。
「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化をする」
織斑先生の指示通りに一夏は白式へと乗り込む。
そして白式は白式で一夏を受け止めるように装甲を閉じていく。
その姿はまさに『白騎士』……。
……あーのー空の向こうでー♪
「あ」

と、そこで一夏が急に声を上げる。……大方、ＩＳのデータにセシリア・オルコット……そしてその専用機『ブルー・ティアーズ』のデータでも表示されたんでしょう。
ブルー・ティアーズ……、中距離射撃型のＩＳ。強力なＥＮライフルと数多のビットを従える第３世代型ＩＳ。
第３世代兵器である『ＢＴ兵器』の実験・試作機という意味合いが強い青い機体……。
正直言って、むちゃくちゃカッコイイ。私が乗りたかった。
でもまあ……私には傷口箱（スカーレッド・ボックス）があるし、いいかぁ……。

「ＩＳのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

織斑先生の言葉。
態度こそ普段と同じと言えど、その台詞は恐らく一夏を心配してのものだろう。
なんだかんだ言って弟が大事なのね。
織斑先生も人間だったってワケだ。

「なあ、時にアッシュダウン」
「え？　あ、はい」
「今夜、私と模擬戦闘をするか？　体一つで」
「何で急に！？」
「いや、お前が何か、私を馬鹿にしたような気がしたのでな」

心を読まれた！？　サイコマンティスかコイツは！
お前の趣味を当ててやろう……お前の趣味は一夏の成長具合を観察することだな。
ふむ、写真（セーブ）はこまめにするタイプのようだな……。

ほう……思考回路（メモリーカード）に掃除という考えが存在しないようだが……？

「やはり、今この場で模擬戦闘をしようか」
「いや、何でですか？！」
「どうにもお前が私を嘲笑ってるようにみえる」

もう眼科行けばいいのに……。まったく、これだから……。

「一発、本気で殴るぞ」
「だから何でですかあ！？」
「大丈夫、千冬姉。いける」
「そうか」
「乱入してくるとは、とんでもないヤツだ！」

とんでもないけど、助かった。
あとでレタスを三切れプレゼントしてやろう。わあ、私って懐が深い！

「箒」

と、そこで一夏は先程から何かを言いたそうにしていた箒へと話しかける。

「な、なんだ？」
「行ってくる」
「あ……ああ。勝ってこい」

うん、実に感動的なやり取りだ。
……篠ノ之箒がキチンとＩＳについて教えていればこの感動は二倍になっていたに違いない。

「それとシェミー」
「ん？」
「悪いが、勝たせてもらうぜ」
「あらそお？　楽しみにさせてもらうわね」

自分からハードルを引き上げるとは……。
果たして、コイツは勇者となるか、愚者となるか。
どちらかし《ｐｒｒｒｒｒ！！》……ら？
誰だよ、携帯持って来てるの……。

「……」
「……」

ほらみろ、織斑先生とか篠ノ之箒とかがむっちゃくちゃ怖い顔してるじゃないの。
……でも何で私を見てるの？　私はありえないわよ、なんたって携帯持ってないもの！　ハッハッハ。

「……あぅ？」

若干焦り気味に音の発信源を探す。
……私に近いような……後ろの方から聞こえるような……。
そう思って、顔から血の気が引く。
――私携帯持ってきてるじゃない。ｘｐｅｒｉａのＡｒｃ……。
そうだ……日本に来てから一番最初に買ってもらったんだった……。
いかん……いかんぞ……！
「あは、アハハハハ……」

苦笑いを浮かべながら後ろに投げっぱなしにしたバッグの中から件の携帯電話を取り出す。
番号を見れば『ニコラス』の四文字……、クソ、あの変態が……こんなときに……！！
イラつきながらも応答する。

「こんなときに何の用よ！！　ぶち殺すわよ！？」
『……そこまで言わなくてもいいじゃないか……』
「タイミングが悪いのよ！！　タイミングが！！　……で、何よ？」

叫んでみて大分落ち着いた。そして織斑先生と篠ノ之箒の目が怖い……！！
あれは人間の『メ』じゃねえ……、殺すべき対象を見つけた猛獣の目だ！

『……織斑一夏っているだろ？』
「……え？　まあ、うん」
『……確か、シェミーによくしてくれたいいヤツ……だろ？』
「そりゃもう、あんたの十倍くらいに」
『……本当に信用できるのか？』

急にニコラスの声色が曇る。

「……できるわよ、私が保証するわ」
『……そうか。……なら、大丈夫そうだな』

心底安心したようなニコラス。
……うん？

「何が？」
『いやいやぁ、彼が乗ることになってる白式を開発してた《倉持技研》ってあるんだけどな、実はそこと私たちシェミハザ機関は極めて友好的かつ深い親交があってな……』
「……え？」
『それで一週間ほど前に日本にいるって連絡したらなぁ、倉持技研のヤツ等が《新しいＩＳが出来たんだけど、見てくれ》って言ってきてな』
「……え？　……え？」

何か、不穏な……。

『で、見てみたわけだ、新しいＩＳとやらを……、そうすればもう……なんかですね、篠ノ之束さんが作ったとか言い出しましてね、我々としてはもう、そりゃもう……神にも等しきお方の指紋が付いたＩＳに触れれる奇跡にも等しき体験をしたわけで……』
「……え、あ。……え？」
『ですね、なんか酒も飲んでないのに酔っちゃいましてねぇ、……気づいたら一週間経ってた』
「はい？」
『そんでですね、倉持技研のヤツ等が言うには———』

……不穏な……！！

『———私たちは一週間白式を弄繰り回してたらしい、気が狂ったように』
「なぁッ！？」
『だからよく分からないものとかイロイロ付いてるかも知れないが……、シェミーの話を効く限りじゃ大丈夫だな』

「何が！？　何が大丈夫なの！？　大丈夫じゃないよね！？　ちょっと！？」
『シェミーに好かれるシェミハザ機関以外の男なんて壊死しちまえばいいんだ』
「ちょッ！？」

ブチッ、と。
通話が切れた。
……一夏を乗せる前に白式を検査したほうがいい……。

「……織斑先生、一夏は？」
「既にオルコットと戦闘してるが、何かあるのか？」
「ハハハ……イヤ別ニ……」

……葬式は、行かせてもらいます……。

六式　俺だけは（後書き）

次回！　『白き騎士、青き旋律、紅き異端』！　絶対に見てくれよな！

みたいな。

七式　雪のように儚く、月のように美しく（前書き）

前回が大幅に改編されてますので、話を読んで『なんだこの超展開！？（驚愕）』となった人は前回の話を見直してみてください。

……見直しても超展開かもしれませんが……。

七式　雪のように儚く、月のように美しく

――試合開始から二十七分。
未だ白式は正常に動いている。

『――二十七分。持った方ですわね。褒めて差し上げますわ』
『そりゃどうも……』

一夏のエネルギーの残量は６７。実体ダメージは中破。武器もかろうじて使えそうだけど。かろうじて使えそうというだけ。
まあ、そんなのはどうでもいい。このまま何事もなく負けてくれるなら本望なの。
……それよりも恐ろしいのは白式がシェミハザ機関によって『ナニカサレタ』ようだということ。
シェミハザ機関は何を仕出かすか分からないのよね……ホント……。
随分前の話なんだけど、傷口箱（スカーレッド・ボックス）に人工衛星に搭載する予定だったのであろう衛星砲（サテライト・キャノン）をＩＳ使用に改造した代物をどっかから持ってきて搭載しようとした時には愕然としたわ。
無論止めさせたけどね……、そんなの積んでも傷口箱（スカーレッド・ボックス）はただでさえエネルギーの絶対量が少ない（本来なら十分にあるのだけど、その大半をスラスターの出力に回してる。正気の沙汰じゃない）のに使えないっての。
っていうか青かったし。赤一色のはずの傷口箱（スカーレッド・ボックス）に無茶苦茶に合わない青だったし。
……本当にどっから持ってきたのよアレ……。

『このブルー・ティアーズを前にして、初見でこうまで耐えたのはあなたが始めてですわね』

私が不安に心を震わせていたところ、セシリアはそう言って自分の周りに浮いている四つの自立起動兵器をまるでフリスビーを取ってきた犬を褒めるかのように撫でる。
フィン状のパーツに直接特殊レーザーの銃口が装着されている兵器。その名は機体名と同じく『ブルー・ティアーズ』と呼ばれている。
……というか、この装備をつんだ実践投入初号機だから『ブルー・ティアーズ』だそうで。
二十七分間の間にセシリアがだらだらと喋ってくれたわ。うむ。また一つ賢くなった。

『では、閉幕（フィナーレ）と参りましょう』

セソロアは笑みと共に右腕を横にかざす。そしてそれを攻撃指令として受け取ったブルー・ティアーズの特殊兵器であるブルー・ティアーズ――名前が長いから以下ビット――二機が多角的な直線機動で一夏へと接近していく。

『くっ……！』

一夏の上下に回ったそれらのビットの先端は眩い輝きを放ち、直後。空色のレーザーが放たれる。それを一夏が防御、あるいは回避をすると、その隙をセシリアのライフルが突いてくる。先程からずっとこのパターンだ。見ているだけでも非常にうざったい。
……いや、別に昨日相手にしたダークレイスに似てるからムカつくとかそんなんじゃなくて……。あそこまでうざったいと思ったファントムは初めてよ。右炎モアに左デモ槍、更に平和にロイド。そして猛毒霧＋酸。しかも死ぬほど多い体力にスタミナ、絶対に怯まない強靭度……。極めつけは此方の一礼を誘っての先制攻撃……。

もう悪意の塊のようなヤツだったわ……ラグからのパリィで何とか逆転できたけど。もう、さすが罪人録一位ね。人間性の欠片も感じられなかったわ。確か名前はＦｒｅｙ……だったかしらね。

……え？　何の話かさっぱりだって？　知りません。

『左足、いただきますわ』

私が昨日の激戦を思い出して『やっぱ二次元はいいなあ』などとシェミハザくさいことを考えている間にセシリアの銃口が一夏へと向けられる。

向けられた先は装甲のない左足。恐らくあそこに攻撃を食らえば絶対防御が発動してシールドエネルギーは残量０。一夏の負けね。

さて、どうする織斑一夏――――。

『ぜあああっ！！！』

ガギンッ！　という派手な音と一瞬の火花。一夏は無理やりな加速でセシリアのライフルの銃身に正面から体当たりを食らわる。その衝撃で砲口が逸れ、なんとかとどめの一撃を免れた。

『なっ……！？　無茶苦茶しますわね。けれど、無駄な足掻きっ！』

セシリアは距離を取り、開いている左手を横に振り、周囲の空間に待機していたビットへと一夏への攻撃指令を下す。

――――終わったか。

私が内心シェミハザ機関の埋め込んだ『何か』が暴発するまえに試合が終わるであろう事に安心しつつも分かっていたこととはいえ、一夏が敗北することに何処となく心が痛む。

――――と、思いきや。

一夏は放たれたレーザーを潜り抜け、一閃。鼓膜を破かんとする

程の甲高い音が響いた直後、ビットは真っ二つにされ、断面に青い稲妻を走らせたかと思うと爆ぜた。
……一機撃墜？
『なんですって！？』
驚愕するセシリアに向けて、一夏は上段打突の構えで切り込む。
……驚くことなかれ、セシリアよ。私だって心底驚いてる。
『くっ……！』
後方に回避するセシリア、そしてまたその右手を振るう。すれば、ビット2と3は一夏へと向かっていく。
普通なら苦痛の表情を浮かべるはずだが、一夏は不敵な笑みを浮かべた。
『この武器は毎回お前が指令を送らないと動かない！　しかも――』
一夏はビットの機動を読むかのように空中で一回転し、背後に回っていたビット2の後部推進器（スラスター）を破壊して落とす。
『その時、お前はそれ以外の攻撃をできない。制御に意識を集中させているからだ。そうだろ？』
「……！」
……一夏の封印が解けられた！！
しかし、これはとてもいい試合ね。
セシリアの知られたくない恥ずかしいトコロがドンドン公にされていくわ。

とぉーってもありがたいわ。ありがたいから全部暗記してやろう。
まあ、そんなのは別にどーでもいいわけで……。
……それよりも私も段々とセシリアの悪い『クセ』みたいなものが二つ三つ分かってきたわ。
どうにも一夏はその内の一つ……最大の悪い『クセ』に気付いたようね。
そのクセというのは“必ず相手の反応が一番遠い角度を狙う”というもの。
……ＩＳの全方位視界接続は完璧。前に居ようが横に居ようが後ろに居ようが上に居ようが下に居ようが何処でも見える。
でも、それを使っているのは人間。真後ろや真下、真上なんかはどうしても直感的に『見る』ことができない。送られてくる情報を頭の中で一回整理する分、そこにはコンマ数秒の遅れが生じる。セシリアはそれを突いている。
馬鹿正直にぶっ放すより効率的かつ教科書通りの戦法。それゆえに効果は非常に高いのでしょうね。
でも、それは逆に言えば『どこに飛んでくるか自分で誘導できる』ということ。
簡単な理屈、自分から隙を見せてトラップを張れば必ずそこに飛び込んでくる。そしてソレを狙って攻撃を出せば攻撃は絶対に命中する。
……しかしまあ、一夏もやるじゃないの。
これは意外と試合が分からなくなってきたわ。
セシリアは自分で勝手にバラしたけど中距離射撃型。近距離格闘の間合いでは十分な性能を発揮しない。
それに、見ている限りでは近接用の装備がない。
待機状態の可能性もあるけれども、それにしたって間合いを詰められてから展開したのでは間に合わないだろうし。
「はぁぁ……。すごいですねぇ、織斑くん」

隣でリアルタイムモニターを見ていた山田先生が溜息混じりにつぶやく。
確かに一夏はＩＳの機動が二回目とは思えないほどの健闘ぶりだった。
だけど、織斑先生は対照的に忌々しげな表情を浮かべる。

「あの馬鹿者。浮かれているな」
「えっ？　どうしてわかるんですか？」
「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

確かにぐっぱぐっぱやってる。

「へぇぇぇ……。さすがご姉弟（きょうだい）ですねー。そんな細かいことまでわかるなんて」

何となく山田先生が発したその言葉に織斑先生はハッとする。

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」
「あー、照れてるんですかー？　照れてるんですねー？」
「……」

ぎりりりりっ。ヘッドロックが相手の頭をギュゥゥゥー！！
超っエキサイティィン！　チフユ――――。

「いたたたたたっ！！」
「いぐぅ！」

――――ドーンと私の右わき腹に鋭い蹴り。織斑先生の蹴りでした。

……さすがの威力……地元で『毒針』の異名（命名者：シェミー・アッシュダウン）を欲しいがままにしているだけあるわ……。
骨が軽くイってしまった気がするんだけど。ねぇ。試合の二日前なんだけど。ねえ。

「私はからかわれるのが嫌いだ」
「はっ、はいっ！　わかりました！　わかりましたから、離し――――あうううっ！」
「……ねえ、織斑先生。私なんで蹴ったの？　いや、何で蹴られたの？　……Ｗｈｙ……Ｗｈｙ……？」
「黙れ」

……酷いや。
ぎゃあぎゃあと騒ぐ山田先生を気にもかけていない様子で、ずっとモニターを見つめているのは篠ノ之箒だった。心なしか、その表情は険しい。

「……」

両手を合わせて無事を祈るような真似をしそうにはない。というか、そういうのとは対極に位置する性格だと思う。
私も祈りはしない、だってむしろ。私って祈られる方だったし。
それに、祈っても神は答えてくれるとは限らないのだから。
――――その時、試合が大きく動いた。
セシリアの間合いに入った一夏は、振り下ろした刃でビット３を撃破。そのままＩＳ独自の無重力機動でビット４に回し蹴りをして吹き飛ばす。
セシリアのライフルは一夏を捕らえきれない。確実に一撃入るタイミングだった。

『――――かかりましたわ』

にやり、とセシリアが笑うのがモニター越しにも見えた。
不穏なモノを感じ取ったのか、一夏は距離を取ろうとするが、それこそ間に合わない。

ヴンッ――――。

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。

『おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！』

回避は間に合わない。しかも、先程までのレーザー射撃を行うビットとは違い、今度は『弾道形（ミサイル）』のようだった。
火薬の爆ぜる轟音。それと同時に一夏は爆発と光に包まれた。

「一夏っ……！」

モニターを見ていた篠ノ之箒が、思わず声を上げる。
さっきまで騒いでいた織斑先生と山田先生も、爆発の黒煙に埋まった画面を真剣な面持ちで注視する。

「――――ふん」

黒煙が晴れたとき、織斑先生は鼻を鳴らした。けれど、どこかその顔には安堵の色がある。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

まだかすかに漂っていた煙が、弾けるように吹き飛ばされる。
そしてその中心には、あの純白の機体があった。
――そう、真の姿で。

◇

――フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

（な、なんだ……？）

意識に直接データが送られてくる。と同時に、目の前に現れるウィンドウ。その真ん中には「確認」と書かれたボタンがある。
訳もわからずそれを押すと、さらなる膨大なデータが流れ込んできた。
――いや、正確には整理されているんだ――。
それが感覚的にわかる。そして、変化は劇的に訪れた。
キィィィィン……。
高周波な金属音。けれどそれはどこか優しいものに感じられた。
せつな、俺の全身を包んでいる――いや、今や我が身そのものの ＩＳが光の粒子に弾けて消え、そしてまた形を成す。

「これは……」

新しく形成されたＩＳ装甲はまだうすぼんやりと光を放っている。
それはさっきまでの実体ダメージがすべて消え、それどころかより洗練された形へと変化していた。

「ま、まさか……一次移行（ファースト・シフト）！？　あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの！？」

さっきのウインドウに書かれていた『初期化（フォーマット）』と『最適化（フィッティング）』が終わったというのは、つまりそういうことらしい。
“これでやっと、この機体は俺専用になった”。
改めて機体を見ると、最初の工業的な凹凸は消え、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的などこか中世の鎧を思わせるデザインへと変わっている。
そして何より変わったのは、右手に握る武器。
――――近接特化ブレード・《雪片弐型（ゆきひらにがた）》。
日本刀から生まれたようなその刀身は、刀より反りのある太刀に近い。鎬はわずかに溝があり、そこから呼応するように光が漏れ出ている。妙に機械的なそれは間違いなくＩＳ装備として作られたものであることを示していた。
それに何より、その名前だ。
――――雪片。それはかつて千冬姉が振るっていた専用ＩＳの名称。刀にに型成した形名。それが雪片。
……ああ、まったくつくづく思い知らされる。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

三年前も、六年前も、そしておそらく十五年前も。あの人はいつでも俺の姉だ。でもそろそろ、守られるだけの関係は終わりにしよう。これからは――――。

「俺も、俺の家族を守る」
「……は？　あなた、何を言って――――」
「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

元日本代表の、その弟。それが不出来では格好が付かない。そう、あの格好いい千冬姉が格好付かないなんて、冗談もいいところだ。

しかも、笑えない。

「というか、逆に笑われるだろ」
「だからさっきから何の話を……」
「――ああ、それに……、こっちも守らなきゃな」

白式に積まれている装備の一覧には先程まで存在しなかった『二つめ』が存在する。
――敵弾自動迎撃システム・《怜悧雪月花》。
白式の両肩沿う様に中に浮きつつも咲く“雪のように儚く、月のように美しく、非常に怜悧な花”。
今はその花は開いておらず、球体状のただのオブジェと化している。
だが、俺が一度意識すると、その花びらを展開していき。
淡い瑠璃色の光が漏れる美しい花と化した。
そして、見える。
怜悧雪月花の名前の下にデータとして存在する文字が。
“シェミーを頼む”という簡素な文字が。
その文字からは何も伝わっては来ない、だけど、わかる。
恐らくこのメッセージを残した相手は心底シェミーのことを大切に思っているのだろう。
そんな思いを託されたんだ――――。

「守らねぇワケには行かねぇよなぁ！」
「だから……！！　……ああもう、面倒ですわ！！」

その弾頭を再装填したビットが二機、セシリアの命令で飛んでくる。またあの多角形直線機動だ。しかも射撃型ビットよりも速い。
だが――――。
――その攻撃を気にする必要はない。

両肩に浮く怜悧雪月花がビットに即座に反応し、一機が一機を捉え、刹那。怜悧雪月花から鋭いエネルギーの槍が放たれる。
そのお陰でビットに割く時間を無視してセシリアへと突撃する。機体の瞬間加速度、センサー解像度はさっきまでの比じゃない。圧倒的に使いやすい。

「おおおっ！」

手の中でエネルギーがその密度を増していくのを感じる。刹那、雪片の刀身が光を帯び、より強い力の存在を俺に伝えてきた。

（いける……！）

セシリアの懐に飛び込んだ俺は、下段から上段への逆袈裟払いを放つ。
———が、その斬撃が当たる直前に決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者———セシリア・オルコット』

……え？

「あれ……？」

たぶん俺は全力で「なんで？」という顔をしていたことだろう。向き合ったセシリアも、ぽかんと口を開けて同じような表情をしている。
そしてそれは、第三アリーナに詰めかけていたギャラリーも、ビットで試合を見守っていた箒、山田先生もだった。
ただひとり、千冬姉だけは「やれやれ」という顔をしている。

……シェミーは何か端っこで何処かへと携帯で連絡を取っている。その表情は何処となく嬉しそうだ。……あれか、俺が負けたのがそんなに嬉しいか。

……ただまあ。

結局俺は何が起こったかわからないまま、試合は終了して、結果俺は———負けた。

◇

……結論から言わせてもらいますと。

「……」

「うんうん、まあ仕方ないわよ。私の厚意をはねたんですもの。負けて当然っしょ」

一夏は負けた。

……うん。負けた。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

おめでとう！　一夏はセシリア・オルコットとの戦闘を得て馬鹿者から大馬鹿者へとクラスアップした！

……おぉう。さすが織斑先生……。

「武器の特性も考えずに使うからああなるのだ。身をもってわかっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればＩＳを起動しろ。いいな」

「……はい」

壊れたオモチャのようにひたすら頷く一夏。
まあ、頷くしかないわな。

「えっと、ＩＳは今待機状態になってますけど、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ」

どさっ。……どさっ？
わぁ、すごい厚い……。まるで電話帳みたい……、すごい分厚い上に一枚一枚がめちゃくちゃ薄い……。何ページあるの……？
……てか、これ私貰ってないわよ？　え？　……え？

「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

敬う気持ちの欠片もない命令。まあ、仕方ないわなぁ……。この人なら勝っても『これで慢心するなよ、さっさと帰って休め』とか言いそうだもんなぁ。負けたら……そりゃなあ……。

「帰るぞ」

おおっと、ここで一夏の周りの優しさ欠乏症人物Ｎｏ．２（セカンド）。名前は我妻箒。
……それは違うセカンドか……。まあ、篠ノ乃箒もなんかヤンデレっぽい雰囲気はあるけどね。

「シェミーも行こうぜ」

寮へと帰ろうとする一夏が私を誘ってくる。ありがたいけどヤメロ、後ろで篠ノ乃箒が睨んでる。しかも眼が死んでる！　なるほど、

篠ノ乃箒のあの意味の分からない肉弾戦での強さはヤンデレ故に現れるモノだったのか……。

「悪いわね、ちょっと用事があるから無理よ」

「あ、そうか。じゃあ先に帰ってるな」

こちらへと手を振りながら一夏は寮へと帰っていく。

ちょっと控え気味に手を振り返す。

よし、カメラを回収するか……。

「アッシュダウン。少しお前に聞きたいことがある」

逃げ……げふんげふん。カメラを回収しようとアリーナから出ようとしたところ、背後から声を掛けられる。

誰か？　織斑先生です。

「な、なんでしょうかね？　織斑センセー……」

「白式が一次移行を終えた際に姿を表した非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）だが、あれは本来だと白式に搭載されていないはずの兵装だ。システム面に欠陥があった為に開発途中で永久凍結になったはずだからな……」

ゆっくりと此方に近づきながら織斑先生は淡々と述べる。……いかん、いかんぞ……！！

「へ、へぇ。そうなんですか。それはすごいですね。グラットンすごいですね！　では、また夜に会いましょ」

再び逃げ……エフンエフン、カメラを回収しに向かおうとしたところ、織斑先生に頭をガシィッと固定される。

詳しく言うと右腕一本で掴まれた。……いたいです……いたいで

す……。

「お前、何か知っているな？」

ギリギリと私の頭を握り締める織斑先生の手はとっても暖かかった。

……ねぇ、知ってる？

手が暖かい人は心が冷たいんだよ……？

七式　雪のように儚く、月のように美しく（後書き）

「次回予告！　遂に姿を見せたシェミー・アッシュダウンの専用機傷口箱（スカーレッド・ボックス）！　そしてセシリア・オルコットとの決戦ッッ！！　その激戦の先に得られる答えは……？　そしてクラス代表は誰が勤めるのか！？　次回、『レッドブルー、翼を授ける。』！　え？　それはレッドブルだって？　黙って見てろ視聴者様ァ！　絶対に来週も見てくれよな！」

みたいな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0956y/

IS≪インフィニット・ストラトス≫～あるびのっ！　祭～

2011年12月11日13時26分発行